魔法先生ネギま！ ～異世界からの暗殺者～

バン・レオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！　～異世界からの暗殺者～

【Nコード】
N４４５６M

【作者名】
バン・レオン

【あらすじ】
１人の少年がトラックにひかれそうになった、神の孫を助けた為に自分が死に、神が孫を助けた礼として異世界に転移した物語。

第1話　プロローグ1

「ここ、どこだ」

ここは、辺り一面真っ白なんだ。

「確か、俺は、学校から帰る最中で」

「起きたよいじゃな」

俺の目の前に突如表れた、ダンブルドア似のじいさん。

「誰だ、あんた？」

「フォッフォッ　わしは、神じゃ」

「…、本当か？」

「本当じゃが」

「そんな、お偉いさんが何の用だ」

「礼を言い来た。孫を助けてくれて、ありがとうの～」

「まさか、トラックに引かれそうになった子か？」

「そうじゃ」

「助かったんだな？」

「助かったが、自分の心配をせい」

「はっ？　自分の心配？」

「見せてやるわい、ほれ」
突如俺の頭の中にトラックに飛ばされ自分が血の海に倒れて居るのが見えた。

「嘘だろ　嘘なんだろ！！　神様よー！！」叫びながら、神に詰め寄った。

「すまんが、嘘では、ない本当の事じゃ」

「くそ　くそー！！」

「じゃがな、例外もある、お主を他の世界に飛ばす。そこで暮らせ」

「…、解った」

第2話　プロローグ2

「でどんな世界なんだ」

「ネギまの世界じゃ」

「…、解った。あといくつか、欲しい能力がある」
(向こうに行って速攻死ぬ)

「解ったさあ言え」

「一つ目に、憤怒の炎、これには、魔法障壁の貫通出来ることと。
二つ目に、色々なを武術・武器を達人の域まで使える力を
三つ目に、頭の中で考えた物を作れる力を
四つ目に、武装錬金のシルバースキーンをくれ　」

「フムokじゃ「待ってくれ！！」どうした？」

「シルバースキーンの色と機能を変えれたいんだか」
「okじゃ」

「まず色は、黒がベースで。機能は、ステルス・あらゆる攻撃を止める・懐から色んな物が出し入れ可能んで、名がシャドウスキーンだ」

「フム〜、まあ平気じゃろ〜」

「それと、原作開始何年前に俺を送るんだ？」

「そうじゃの〜、７００年ってどうじゃ？」

「歳で死ぬわ！！！」

「フッ、抜かりは、ない。お主を不老かすればいいじゃろ」

「…、不老か！？　あのエヴァンジェリン見たいのか？」

「まあ、似ていると言えば、似とるの〜」

「それなら、原作６５０年位にしてくれ」

「まあ、良いがなぜ６５０年じゃ？」

「５０年で色々試したいし、長すぎると退屈だから」

「解ったワイ、それじゃいっ「まてー！！」なんじゃ今度は？」

「容姿を変えられるか？」

「出来るが？」

「良し！！　容姿をＦＦのクラウドにしてくれ！！」

「まあ、良いが。一応、護衛を付けとくか？」

「ありがとうよ。で　その護衛って誰？」

「向こうに行ってからのお楽しみじゃ」

「解った」

「んじゃ、今度こそ行ってこい」
神様の後ろから、とてつもなくデカイハンマーが出てきた。
「マサかな「ほいっとな！！」　ヒイ！！マジカヨー！！」

ハンマーが振り落とされた。

ヒューーー

ドッカン　！！！！

そこには、俺は居なかった。

「フム、行ったか」

「おじいさま、ありがとうございます！！」

子供が神の後ろから表れた。

「良いのじゃ、さて行くかの～」

「はい！！」

第３話

「神のバカヤロー！！」
只今、パラシュート無しスカイダイビングの最中。

「早くも、死ぬのか俺！！」
わめき散らす俺。

ヒューーーー
地上まで残り１０００ｍ

「くそ！！　なにがなんでも、生き延びてやる、来い俺のシャドウスキーン！！」
突如表れた、服が俺を包みこんだ。

「意味ねー！！」

ヒューーーー
地上まで残り７００ｍ

「これならどうだ、両手に憤怒の炎を灯して、ツナ見たいに飛べるように考えろ」

徐々に炎が手に集まって来た。

「よし！！　　いっけー！！！」

両手の炎を勢いよく下に放った。

「フゥ、とりあえず、落下死は、まぬがれたか。てか、慣れると面白いなこれ」

両手から炎を出しながら降りて行った。

「ンー、ここどこだ？」

見渡す限り樹海が広がっていた。

「迷子確定だな俺　」

突如、神様が表れた。

「悪いな、こいつを渡すのを忘れていたワイ」

「はっ？」

「これじゃ、これに《来い》と言えば良いのじゃ」

ペンダントを渡された。

「やってみるか、《来い》」

ボン
なぜか爆発がし、砂煙が舞った。

「えっ何！？」

砂煙が晴れ、そこに居たのは、『フルメタル・パニック』に出てくる、主人公機のＡＳ：アーバレスト（アル）が膝待つ居ていた。

「…、神様　何でアーバレストが出てくるんだ！？」
戸惑いつつ神に聞いた。

「これはの〜、自分の記憶に一番刻まれている物をコピーし作りだすのじゃ」

「えっ　てことは、他の奴にも「無理じゃ」何で」

「一度コピーしてしまうと、他のには、出来んのじゃ」

「へー、そうな「マスター」へっ　誰か言った」

「私です。　マスター」

「そうじゃ、名前を付けてやれ。それじゃワシは、帰るわ」

「ああ、ありがとうな神様よ」

そして、神は光に包まれて消えた。

「マスター、私の名前は？」

「名前は、アーバレストこれで良いな？」

「ハイ、今後よろしくお願いします」

「んじゃ、アーバレストの能力って何？」

「私の能力は、ＥＣＳ不可視モード、高速演算装置、等です。必要があれば、機能を変えられます。」

「いや、今は、要らない。てか、格闘技を教えてくれ」

「了解、マスターでは、行きますよ」

「おう、手加減無しだ！！」

そのまま、1時間は、格闘をしていた。

～神の間～
「やっとるやっとる」

「大丈夫でしょうか？」

神とその孫が俺とアーバレストの格闘を見ていた。

「まあ、奴には、強くなって、もらわんとな」
そう言って笑う神

第４話

「ハッ　ハッ　ハッ」　只今、シャドウスキんーを両手に着け、大木を殴っている。

「そろそろ、時間です。マスター」
俺に声をかけてきた来たのが、神からの贈り物『アーバレスト』

「もう、２時間経ったのか」

「はい、マスターは、集中してましたから」

「なぁ、アーバレスト、ここに来て何年たった？」

「約５年でしょう」

「そうか、なら仕事でもするか」

「どういうのですが？」

「そうだな、外道野郎の暗殺と情報屋なんかか」

「…、後者は、良いですが、暗殺は、やらない「アーバレスト」何ですか？」

「俺が殺すのは、外道な奴らだ、それ以外は、ボコス程度だ」

「女、子供もですか」

「その時による」

「わかりました、お供します。マスター」

「ああ、その前に腹ごしらえだな」

そう言って、自分の家に向かう。

俺が造った、家は、日本風の屋敷である。

何でかだって?

周りに有るのが木々だったたから。

それに俺の能力にリミッターがついて入るみたいだから。

「んじゃ、行ってくるわ、留守番よろしくな」

「はい、マスター」

俺は、森の中に歩いて行った。

１時間は、走ってるよな。

「やっと出れた」
俺は、倒れていた、大木に腰を降ろした。

「ん、この臭いは、血」
どこらか、血の臭いが漂ってきた。

「向こうか、…行って見るか」
俺は、立ち上がり血の臭いがした方に走っていった。

５分後
「何だあれ？」
俺の目に入ったのは、かなり大きい屋敷だった。

「やっぱ、ここから血の臭いがするな」

「イャー！！」

突然、悲鳴が鳴り響いた。

「何か知らんが間に合え！！」

俺は、屋敷の中に飛び込んで行った。

ガシャン

ガラス窓に飛び込んだ。

そこに居たのは、…

—〇〇2サイド—

何時も道理にお屋敷の掃除をしていたら、突然ご主人様が私達、メイドを集めて、1人1人に聞く事があると言って、1人ずつ、連れていきました。

「何があんのかな？」

隣の子が聞いて来ました。

「解ら「イャー！！」なに今の！！」

ご主人様がメイドを連れ行った部屋から悲鳴と血が流れて来ました。

「ハハハ　成功だ、これで一緒になれる！！！」

部屋から出てきたのは、１メートルは、ある肉の塊が出てきたのです。

突然、窓ガラスが割れて飛んで来たのは、全身黒の服を着た人でした。

―シャドウサイド―　俺の目に映っているのは、肉の塊から顔や腕が出ている物体です。

「おいおい、何だあの塊は？」

(あの顔は、かなりの美人だったろうな)

俺は、懐からハード・フレアとジャッカルを取り出して肉の塊に向けた。

「安らかに眠りな」

ガンガンガンガンガン

二丁の銃から放たれた弾は、全弾命中し爆発した。

「憤怒の炎の入れすぎか？」
放った弾は、〈死ぬ気弾改〉これは、俺の炎を弾の中に蓄積させ、物体の中で爆発を起こす。

「大丈夫か？」
俺は、倒れていた、メイド達に近づいた。

—〇〇2サイド—
私は、飛び込んで来た人の力に驚きました。

「あの〜、あなた様は？」

—シャドウサイド—
「あの〜、あなた様は？」
突然、1人のメイドから声をかけられた。

「俺の名は、シャドウ」

「シャドウですか？」

「ああ、そうだ、君たちは？」

「あっ！！　はい私の名は、ノーアです」
「私は、エレンです」

「君ら、二人だけかい？」

「はい、そうです」

「…、どこか、いく宛は、在るのか」

「「…」」
二人は、黙ってしまった。

「まあ、宛がなければ、俺の家に行け。案内人を置いてくから」
そう言って、俺は、サベージ（約2メートル）を召喚した。

「！！　あのこれは？」

「俺の部下、そいつに着いていけ、そして、アーバレストって奴に会えば良い」

「はっ　はい！！　行きましょ、エレン」

「はっ　はい！！」

「元気で暮らせよー」

「「ありがとうございます」」

俺は、ノーアとエレンを見送ってから、屋敷の中を散策していると、一枚を見つけて読んでいた。

「何で、こいつが、《完全なる世界》を知っている？」
俺は、ここの主がなぜ奴らを知っているのか不思議だった。
「まあ、良い、ここを燃やせば良いだろう」

屋敷の外に出て、屋敷に火を放った。

「ゾッ　やな予感がするな、早く行こう」
俺は、その場から離れた。

アーバレストサイド　「そうですか、大変でしたね」

（あの、馬鹿マスター）

アーバレストは、二人の話を聞きながら、切れていた。

第5話

只今、クズ野郎どもの処刑中

「待ってくれ！！」

「うるせー、死ね」

俺は、男の体に鋼糸を巻き付けて肉片にした。
なぜ、こうなっているかだって？
それは、１日前になる。

屋敷を出てから、２０年たった頃。

「ふぁ～、かったるい」

男の周りに死体が落ちていた。

「エレンとノーアは、元気でいるかな」二人は、あの後無事に屋敷に着いて、故郷に戻ったとアーバレストから聞いた。

ガサ

「誰だ」

俺の後から音がした。

「待ってください」　出てきたのは、ぼろぼろの服を着た１０歳ほどの少女が出てきた。

「…、名前は」

「はい！！　フェルンです！！」

「…、フェルン　俺に何の用だ？」

「ある人を殺して下さい！！」

「理由は」

「あなたがシャドウと言う《最強の暗殺者》だからです」

「…、じゃなくて、何でそいつを殺したいかだ」
（かなり有名になってきたな）

「姉を殺したからです…」
フェルンは、徐々に泣き始めた。

「大丈夫か」
（かなり、辛いことか）

「はい、ありがとうございます」

「まあ、座りな」

「はい」

そう言って、フェルンを座らせた。

「まず、俺が殺すのは、クズで外道な奴らだ。例外もあるがな」

「平気です。姉を殺したのは、奴隷商人の「レジーロ」！！ 知ってるんですか！！」

「レジーロ、最近商業何かで名を上げている人物と聞いた」
「レジーロは、裏で色んな村から人を連れ去って、「奴隷としつ売る」…」
「大方、そんなもんだろ」
「はい」
「引き受けよう」
俺は、そう言いながら立ち上がった。
「ありがとうございます！！」
「礼は、要らねー」
「えっ！！」
フェルンは、驚いた顔をした。
「俺が殺すのはな、そういう奴が嫌いだから殺すんだ」
俺は、それだけ言って、闇に消えた。

「あれか」
俺は、あの後すぐにレジーロの屋敷に向かい、少し離れた、場所から、見ていた。

「門に二人、手薄だな」
俺は、シャドウスキーンを着て屋敷の中に入った。

「どうぞ、これが新商品です。貴族様」
金髪のデブが、誰かに話している。

「ふむ、これがか、良い仕事ぶりだな、」　こっちは、金髪のガリぼそだな。

二人の視線の先に鉄格子の中に一人の少女が居た。

(販売中か、好都合だな)

俺は、デブがレジーロ、ガリが貴族と決めた。

「して、価格は？」

俺は、その瞬間、デブの背後に降り立ち、鋼糸でデブとガリに巻き付けた。

「「!！？？」」

「こんばんは、レジーロ」

「だ誰だ！？」

「なぁ～に、ただの　暗殺者だ」

二人の顔がこわばった。

「「ひっ　ひい！！」」

「おっと、下手に動けば、肉が切れるぜ」

二人は、おとなしくなった。

「まず、他の奴隷の居場所を吐け」

「ち　地下だ」

レジーロは、おとなしく言った。

「ありがとう、それじゃ、さようなら」　俺は、奴隷の居場所を聞くと鋼糸を引いた。

「待ってくれ！！」

「うるせー、死ね」

俺は、男の体に鋼糸を巻き付けて肉片にした。

俺は、レジーロから聞き出した、奴隷の居る地下に向かっていた。

「ここか」

目の前に囚人を居れる鉄格子が見えた。

（予想以上に酷いな）

鉄格子の中には、衰弱しきった、子や女が居た。

俺は、鋼糸を使って鉄格子を切り裂いた。

「俺は、お前ら助けに来た」
（アーバレスト、聞こえてるか？）

（何でしょうか、マスター？）

（この奴隷が元居た場所に戻しといてくれ）

（了解、マスター）

俺は、その場を離れた。

「後少しだ」
月を見ながら誰にも聞こえない様に呟いた。

第6話

俺は、久々に自分の家に帰りアーバレストと武器の手入れをしていた。

カチャカチャ

「何時の間に集まったんですか？、例えば、この西洋剣なんか」

「…もらった」
(殺して奪ったて、素直に言えないよな)

「まあ、良いですけど」

「それより、機体は、どのぐらい出来た」

「サベージが7機、ベヘモスが上半身だけです」

「サベージは、良い。ベヘモスがなんで上半身だけなんだ」

「材料が少ないため「もう良い」了解」

「今ある機体に人工知能を取り付けろ」

「了解」

話が終わる頃に整備が全て終わった。

「もう少しゆっくりしていけば、良くないですか」

「時間は、待たないからな」
俺は、シャドウスキーンを着た。

「エヴァンジェリんですか」

「ああ、そうだ」

「きおつけて」

「ありがとうよ」

俺は、離れた後、どこかの町の飲み屋に訪れた。

「いらっしゃい」

「何時ものを」

マスターは、それを聞くだけで酒を注いだ。
ここは、表向きは、酒場だが裏では、非合法な仕事の紹介や販売をしている（奴隷以外）。

「おすすめは、なんだ」

「依頼なら、あるぞ」
背後から声が聞こえた。

「あんたは？」

「ワシは、フィリウス・ゼクトじゃ」

「フィリウス・ゼクト」
（原作キャラにあっち待った！！　どうする！！）

「依頼じゃが、ある遺跡の調査じゃ」

「良いだろう」
（転移魔法を教えてもらおう！！）

「明日の朝にまた、訪れるわい」

「ああ」

ゼクトは、去った。

（用意するか）
俺は、今後の事をまた考えた。

「おい！！！　ゼクトなんじゃありゃ！！！」

「ふむ、大変じゃの～」

俺とゼクトは、遺跡の中で調査していると、突然、トラップが発動して槍や岩何かが降ってきた。

「あれは、出口じゃな」

「おお！！」

本気で走っている二人。
その勢いで、飛び出たら、

「「！！？？」」

谷に飛んでしまった。

「はっ！！！」
俺は、ナイフに鋼糸を付けた物を壁に刺した。

「ゼクト大丈夫か」

「ふむ、大丈夫じゃ」

ゼクトは、魔法で空中に浮かんでいる。

「…、ゼクト」

「なんじゃ」

「そろそろ、魔法を教えてくれないか」

「良いぞ」

「本当に良いのか」

「ああ、良いが」

「それなら、早く帰るぞ」

俺は、そのまま、ロッククライミングをした。

自己紹介（前書き）

自己紹介、遅れてすいません

自己紹介

名前：シャドウ

性格：基本優しい、

容姿：クラウド・ストライフのまんま

年齢：２０歳（原作時６７０歳）

能力：憤怒の炎は、自分が造った、武器に炎を流せる。
　アーバレストと格闘をしていた為、空手、ボクシング等がプロ級。
　考えた物を作れる力には、欠点あり（アーバレストが持ち、材料がないと作れない）
　シャドウスキーンを持っている（シルバースキーンの能力とステルス機能、高速演算装置等を持っている）

職業：暗殺（フリー）者

２つ名：「漆黒の追跡者」　「命を刈る者」
「機械使い」（マキナマスター）

好きな物：色々

嫌いな物：せこい奴

第7話

現在、俺とゼクトで焚き火を囲みながら、酒飲み中〜。

「なぁ〜、ゼクト　今までありがとな」

「なんじゃ、いきなり」

俺は、今日に至るまで、ゼクトから魔法を教えて貰っていたのだ。（約２５年）

「俺も用があるから、別れ様と思うからな」

「そうか、まあお主なら平気じゃろうからな」

俺がゼクトから教えて貰った術は、主に転移魔法だった。

「なんか、思い出すだけで嫌だな（修行の間に仕事をやっていた、暗殺関係が）」

「そんなに、大変じゃったか」

「いや、そんな意味じゃない」

そんな、話をしながら夜が明けるのを待った。

「ん～、寝過ぎだなこりゃ～」
俺は、辺り見回して、気付いた。
(ゼクトが居ない？　まあ良いか)

俺は、立ち上がり、一旦家に戻ろうと考えた。

ゴアアア！！！

突然、咆哮が轟いた。

「なんだ」
俺は、シャドウスキーンを着て、戦闘体制になった。

ゴカァ！！

大木が上から飛んできた。

「チィ！！」

俺は、憤怒の炎を両手に集めて、大木を真っ二つにした。

「なんか、知らねーが、処刑だ」
大木を飛ばした奴を殺しに行った。

森の中を駆け抜けると、ワイバーンがいた。

「…、やべー」
（ワイバーンがなんでここに？）

ワイバーンが口を開けて火を吹いた。

「なっ！！」
俺は、瞬時に転移をした。

「一気に殺してやるよ！！」
俺は、頭の上に転移いして右手に憤怒の炎と魔力を混ぜた、憤怒の炎改でワイバーンの頭を殴った。

ドシャア！！

ワイバーンの頭が粉砕して脳ミソや骨が飛び散っていた。

「こんなもんか」
(脳ミソがグロい)

俺は、ワイバーンの死体をそのまま放置して帰った。

「ただいま〜」
俺は、日本屋敷の門を蹴り破りながら、入った。

カチャカチャ

周りで警備ロボットが武器を構えていた。

(サベージか?
すでにここまで出来ていたのか)

「お帰りなさいませ、マスター」
アーバレストが出迎えてきた。

「アーバレスト、サベージは、ここまで出来ていたのか」

「何しろ25年位、居ませんでしたからね」

「ハハハハハ」
(アーバレスト!!
壊す!!)

「それよりも、エヴァンジェリンの方は、どうなんですか?」

「少し世の中の厳しさを教えようと思ってな」

「そうですか」

「魔女狩りで捕まったら助けるから」
俺は、それだけ言い、屋敷の中に入った。

(俺の部屋、変わって無い…あれ?　俺の集めた武器がない?)
不振に思いアーバレストに聞きに行った。

「ア～、斧や剣ですか、材料にしました」

「ハッ、材料にした！？」

俺は、アーバレストが言った事に呆けてしまった。

「アーバレスト、あれだけの武器を集めるのにな、どれだけの歳月がかかったか」

「材料を集め無い、マスターが悪くないですか」

３０分ほど話合う二人。（武器を構えたまま話合う）

第8話

只今、高度100m　時速100km程で飛行中。（憤怒の炎を足に集めて、その力を推進力に変換して飛んでいる）

「アーバレスト！！　後、どのぐらいだ！！」

「後、1分」

耳元にある無線機から聞こえた。

何故、飛んでいるかだって？
そりゃー、エヴァが殺されるのを防ぐ為にだ。何しろ、今までの処刑方法［火炙り］じゃ死な無いが、今回は、違う！！　［不死殺し］のヨアヒスが居る！！

「待ってろ、エヴァ！！」

「これより、処刑を行う　　罪人　前え」

（始まったか！！）

俺は、処刑所から１００ｍ離れた、所から見ていた。

既にエヴァは、十字架に貼り付けられた。

「最後に言うことは」

神父が尋ねた。

エヴァサイド

「最後に言うことは」

（もう、死にたい）　私は、地面を見たまま、思っていた。

「無いな、火をつけろ」

その一声で、松明を持っていた、兵士が薪に火を放とうとした。

（やっと、死ねる）　火を眺めながら、最後に思っていた。

「そこまでだ！！」

シャドウサイド
「そこまでだ！！」俺は、松明を持った、兵士を気絶させせながら近づいた。

「貴様！！　なぜ、シャドウが居る！！」

「ただの気まぐれだ！！」
（ヨアヒスが居ない？　まあ良い、とりあえず、全員を殺すだけだ）

俺が両手に銃を持ち構えると神父が

「あやつも神に反する者だ！！　殺せ！！」

回りの兵士が、槍や剣を俺に向けて構えた。

「邪魔をするのは、殺す」

そう言って、４分で全員を殺した。

（また、賞金が上がったな）
現在の賞金額が２００万程度だった。

俺は、十字架に貼り付けられた、エヴァに近づいた。

「気を失っているだけか」
俺は、エヴァに刺さっている、釘を抜いていた。

「ウォーー！！」

突然、背後から咆哮が響いた。

「誰だ！！…なんじゃありゃ」
目線の先に居たのが、身長２ｍの大男が自分の身長と同じ位の大剣を片手に持ち、立っていた。

（まさか、あれが、〔不死殺し〕のヨアヒス！！）

俺は、急いでエヴァに刺さっている釘を抜いた。

（ヨアヒスと戦えば、エヴァにも被害がおよぶ！！）

ヨアヒスが大剣を振りかぶり、走ってきた。

「クッソーー！！」　俺は、持っていた、Ｍ７９グレネード・ランチャーをヨアヒスに放った。

ヒュー　　ドガン！！砂煙が舞った。

（榴弾だこれで、死んだだろう）

俺は、確信したが、砂煙が晴れると、ヨアヒスが立っていたのだ。

「何！？」

俺は、驚愕した、榴弾を食らっても、かすり傷しか無いことに。

「ウォーー！！」

ヨアヒスが再度、突撃してきた。

「なら、これだ！！」

今度は、４５口径のハード・フレアを2丁転移させ、両手に構え、全弾を食らわせた。

だがそれも、ヨアヒスを怯ませる程度だった。

「45口径だぞ!?
　なら」

俺は、ヨアヒスに鋼糸を巻き付けた。

「これで、終わりだ!!」

鋼糸に憤怒の炎を通し、切り味を高め、切り裂いた。

「グロいな」
ヨアヒスが立っていた、場所には、血と肉だけが落ちていた。

(さすがに死んだだろう)
俺は、エヴァに刺さっていた、最後の釘を抜いた。

「良く、頑張った」　気絶している、エヴァの頭を撫でた。

「アーバレスト、今から帰るから、風呂の用意をしといてくれ」

「了解」

俺は、エヴァをお姫様抱っこして、消えて行った。

第9話

「シャドウ！！」

「殺さないでくれ！！」

「ヒィー！！」

「またか、また」

死体達の真ん中に一人たたずみ両手を眺めていた。
闇に消えた。

「ウウ　ハッ　そうか、帰ってきたのか」
(今まで、殺して来た、奴らか)
俺は、夢の内容を思い出していた。

「マスター、朝です」

アーバレストが障子を開けて入ってきた。

「ああ、今行く」

アーバレストは、障子を閉めてどこかに消えた。

（エヴァを起こすか）

俺は、隣の部屋で寝ていた、エヴァを起こそうと扉を開いたら。

「やあ！！」

「いてー！！」

立て掛けて置いた、木刀をエヴァが振りかざして、来た。
俺は、木刀をかわせず、額に当たった。

「…はっ、すいません！！」

「待てこら！！　命の恩人に何する」

逃げようとする、エヴァの足掴んだ。

「えっ！！」

「良いか、逃げるな、そして、座れ」

「はい」

エヴァを降ろして、座らせた。

「まあ、自己紹介だな、俺は、シャドウよろしくな」

「わ　私は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル」

「んじゃ、エヴァで良いな」
(ミドルネームは、教えないか)

「うん!!」
首を縦に振るった。

「エヴァ、君は、吸血鬼だね」
(確認はしないとな)

「…、そうだよ」
下を見ながら、呟いた。

「わかった」

「えっ！！　怯えたりしないの」

「化け物なら俺もだから、それに一部じゃ畏怖の対象だしな」

「嘘、私以外に迫害されてるのがいるなんて」

「まあ、エヴァと同類だな」

「うっ　うっ　うっ」

「よしよし、泣きたきゃ泣け」

泣きながら抱き付いたエヴァの頭を撫でた。

１０分後
「エヴァ、泣き止んだか」

「うん、ありがとう、シャドウ」

「ああ」
（ヤバい、エヴァの笑顔が！！）

俺は、エヴァの笑顔にやられそうになった。

「それじゃ、エヴァには、生きるすべを教えよう」

「うん！！」

「きついぞ、エヴァ」

「わかったよ、シャドウ」

そして、エヴァとの修行が始まった。

「遅いですね、マスター」
ただ一人、待つアーバレスト…。

第１０話

「まず、エヴァには、魔法を教えよう」俺は、まず魔法を教えようと考えた。

「魔法？」

「ああ、魔法だ、エヴァにだって、魔法の才能があるからな」

「魔法って火とか水を出すやつ？」

「まあ、そういうのも有るが、より実戦的なのを教える」

「例えば？」

「見ていろ、魔法の射手　火の１矢！！」

ドッ　　バガン！！

右手から出た、射手は、少し離れた岩に当たり、砕かせた。

「スゴイ！！　シャドウ他には？」

「在るが、練習中に見せる。それと、今のは、実戦魔法の中では、低いほうだ」
「今ので!?　これ以上のがあるの!!」
「あるから、練習を初めよう」
（エヴァの笑顔は、良いな。アーバレスト写真で撮っておけ）
練習場から少し離れた場所で
（了解）
「何やってるんだ、マスター」
1人ぐちるアーバレスト。

～1時間後～
「すごいな」
（まさか、たった1時間で魔法の射手を50矢を放てるなんて）
エヴァの天才にあぜんとする俺だた。
「シャドウ、これで良いの?」
（首を傾げる姿も良いね～）

「ああ、そうだな、他に鋼糸の使い方も知りたいか？」

「鋼糸って、キラキラ光ったやつ？」

「ああ、そうだ、だかな鋼糸は外見とは違い使い方が難しいんだ、それでも、教わりたいか」

「うん！！　シャドウと同じ武器を使いたいから」

「まずは、この糸を使って練習だな」

「はぃ！！」

～1時間後～

「ハァ　ハァ」

手には、糸が絡まっていた。

「やっぱり、これは、練習有るのみ」

鋼糸の練習をしていた、エヴァだが魔法みたいに上手くは、いかない。

「よし、家に戻るか」

「うん！！」

「その前に風呂に入るか」

「風呂って何？」

俺は、エヴァを肩に乗せながら、歩いた。

「風呂は、湯に浸かりながら、身体を洗う場所だ」

「解った」

「それじゃ、到着」

俺の目の前には、立派な露天風呂が合った。

「スゴい！！」

はしゃぎながら、風呂に近づくエヴァ

「こら！！　はしゃいで転けるなよ」

注意しょうと声をかけたら

ツル　ゴン

案の定転けた。

「ウウウ」

頭を抑えながら涙目で俺を見ていた。

「言ったそばから。　大丈夫か、エヴァ」

「頭が痛い」

（ヤバい、理性が！！）

俺を涙目で見上げていた。

「これからは、あまりはしゃぐなよ」

エヴァの頭を撫でながら注意した。

「うん！！」

「よしよし、それじゃ風呂に入るか」

俺は、服を脱ごうとすると息なり後頭部にゴム弾が命中し気絶した。

ガサガサ

「たく、マスターは、子供に手を出す気ですか」
林の中から、アーバレストがＬ９６Ａ１を抱えて出てきた。

「すいません、エヴァ殿、シャドウ殿を連れていきますね」

「うん」
何が起きたか、解らないエヴァは、そう言った。

「それでは」
アーバレストは、俺の引きずりながら屋敷に戻って行った。

あの後、俺は、自室で目を覚まし、アーバレストにエヴァと風呂に入るなと約2時間言われ続けた。
そして、今後エヴァと風呂に入れなくなった。

（アーバレスト、ばらそうかな）

1人、物騒な事を考えた俺であった。

第11話

エヴァが家に来てから200年が経とうとしていた。
そして
俺とエヴァは、いつも道理の組手をやっていた。

「くっ！！」

「ほら、エヴァ！！　どうした、得意の魔法は！！」
俺は、エヴァが逃げようとした場所に槍を投げつけた。

「なっ！！」
エヴァは、槍を紙一重でかわしたが、突然、槍から幾つ物鋼糸がエヴァの身体に巻き付いた。

「はい、エヴァの負け」
俺は、動けなくなった、エヴァに近づいて鋼糸を解いた。

「今のは、なに？」

「槍の事かぁれは、『拘束の槍』だ、対象に近づくと鋼糸が巻き付く仕組みだ」

俺は、アーバレストと色々な武器の開発をして、そういうのを作った。

「ふぅ～ん、じゃ先に戻ってるね」
そう言って屋敷に帰って行った。エヴァ
「最近、夜遅くまで何かを作っているんだ？」
俺は、エヴァが何かを作っている事に気付いていた。

「まあ、良いか、鹿でも狩って帰るか」
気楽に帰宅した。

その晩
「お～い、飯できたぞ～」
俺は、狩って来た鹿を鍋にして、エヴァに声を掛けた。

「……」

（返事が無い？）

不振に思い、エヴァの部屋に向かった。

「エヴァどうし」

ドゴン！！

「なっ！！　エヴァ大丈夫か！？」

突然、エヴァの部屋から小規模の爆音が響いた。

「ケホッケホッ　大丈夫だよ、シャドウ」　エヴァがぼろぼろになって、出てきた。

「一体、何を「ケケケ、ヒドイショウカンダナ」はっ！？」　エヴァの足元にぼろぼろの人形が立っていた。

「…、エヴァこれは、何だ？」

「これは、従事者のチャチャゼロだよ！！」

「マア、ヨロシクナダンナ」
チャチャゼロが右手を出してきた。

「ああ、こっちもよろしくな、チャチャゼロ」
俺も右手を出して、握手した。

「よし！！　チャチャゼロ、誕生を祝って、カンパ〜イ！！」俺は、新しい家族の誕生を祝おうと、秘蔵の酒を出したのだ。

「「カンパイ！！」」

エヴァとチャチャゼロが手に持った、酒を一気に飲んだ。

「いや〜、また家族が増えたな〜」

俺は、コップに注がす、ラッパ飲みをしていた。

「シャドウ、飲み過ぎは、身体に悪い」

「ケケケ、イイノミップリダナ」

二人も二杯、三杯と飲んでいた。

「ハハハ、良いじゃないか！！　久しぶりに飲んでいるんだから」

羽目を外して、瓶は、すでに１０本ほど落ちていた。

その晩は、三人で飲み明かした。

アーバレストは、
「うるさい」と愚痴っていた。

結果、飲み過ぎで一週間は、動けなかった、俺とエヴァであった。
「ケケケ、バカだな」 寝込む二人を眺めて、チャチャゼロが呟いた。

第１２話

チャチャゼロが誕生して５０年がたった頃
「エヴァ、そろそろ旅に出るか」

「えっ！！　今さら？」
戸惑いながら聞いてきた。

「外の世界を見るのも良いし、実力を確かめたいしな」
(魔法世界で名を上げたいからな、俺)

「そうか、いく場所は決まっているのか？」

「いや、この旅は、自分の実力を確かめるためだから、俺とエヴァは、別々の場所に行くんだ」

「…、そう」
(シャドウとは、しばらく離れ離れか)
「エヴァ、俺は、何時でも一緒だ、だから、仮契約をするか」

エヴァから落胆の表情が見えたから、悲しませ無いように仮契約をしようとした。

「良いの？」

「ああ、エヴァだからこそ、契約の意味があるんだろ」

「／／／　シャドウ」

「少し待ってろ、今魔法陣を用意する」　そう言って、懐から古びた一冊の本を取り出した。

「〈術式展開〉」

すると、エヴァと俺の回りに仮契約の陣が展開した。

「これで俺がエヴァの従事者だな」

「えっ？　何でシャドウが従事者なの？」

「まあ、良いじゃないか、それじゃよろしくな、エヴァ」

「へっ！？」

そう言って、エヴァの唇をふさいだ。

光が俺とエヴァを中心に輝いた。

「よろしくな、エヴァいやマスター」

「／／／うん！！」

(オレガ入ルノヲ、忘レテナイカ)
二人の世界を眺めていた、チャチャゼロが考えていた。

「…、なぜ日本刀？」
カードに出ていた、俺は、シャドウスキーンを着て、黒い日本刀を構えている姿が書かれていた。

「何々、『漆黒の断罪者』？」
エヴァは、隣で俺のカードの名を言った。

(…、エヴァが寝ている内に奴隷商人や腐った貴族を殺したからか！？)

（何でシャドウは、『断罪者』何だろう？）

「まあ、アーティファクトを出しますか。《来れ》」

すると、刃も柄もが黒で統一された刀を握っていた。

「ケケケ、面シロソウダナ」

突然、刀から禍々しい妖気が吹き出た。

「…、一体何だこれ」
（この異常な妖気に殺気、まるで刀自体が生きてるようだ）

「シャドウ、大丈夫？」
少し怯えているエヴァが見えた。

「ああ、大丈夫だよ、エヴァ」

「…、そう、シャドウ」

「《去れ》　ありがとうな、エヴァ」
俺は、刀を消して、エヴァに礼を言った。

「うん！！
　それとね、これは、私からのプレゼント」
モジモジしながら、ガラスの球体を俺に手渡した。
「これって、エヴァが作っていた、『別荘』じゃ？」
「2つ有るから、シャドウに1つあげる」
(何て、良い子なんだ！！)
「よし、おまけで俺の魔術書を全てあげよ！！」
「えっ！？でも、それって、シャドウが大事にしてたやつじゃ」
「あれは、大事にしてたんじゃなくて、危険な魔法が会ったから、持ち出せなかったんだ」
(だって、人体魔法やら人外的なのが有ったからな…)
「ありがとう、シャドウ」
笑顔で俺に抱き付いた。

「んじゃ、俺は、この屋敷を別荘の中に入れますか」
俺は、両手をつき出し、『別荘』の中に屋敷を転移させた。
「エヴァ、あんまり無理するなよ、チャチャゼロ、エヴァを守ってやれよ」
「じゃあね、シャドウ」
「ケケケ、又ナダンナ」
俺は、旅に出た。

第１３話

エヴァと別れて、約２００年

各地に居る、武人達と闘った。
中国では、中国拳法の達人や少林寺の人間と闘い（魔法無しの素手）武神的存在になり
日本では、甲賀最強の忍者と一対一で闘い、和解し飲み仲間となった。

そして、今
「…何処だここ」
一人、森の中を歩いてた。

そもそもの原因は、他の場所に行こうと転移をしたら、２０ｍ台の木々が生い茂る、密林に出てしまった。
「はー、アーバレスト、ここ何処だと思う」

「魔法世界かと」

「…まじ、最悪だ」　その場に仰向けに倒れた。

「マスター、レーダーに反応、南５０ｋｍ先に街があります」

「…行くぞ！！」
俺は、立ち上がり転移した。

「…デカイな」
俺は、街の中央の通りを歩いていた。（シャドウスキーンを着て）

「ん～、食い物は、旨いし、安いし良い店だな」
俺は、とあるレストランで食事をしていた。

「待ちやがれ！！」
「逃げるんじゃねぇ！！」
ごろつき数人が幼い姉妹を追っていた。

「君、あれは、何だ？」
俺は、近くに居た、ウェイターに聞いた。
「奴隷が逃げ出したんで、商人が捕まえようとしてるんです」

「ありがとう、礼だ取っておけ」

そう言って、ウェイターのトレイに金を乗せた。

そして奴隷に目線を向けた。

「素質が有りそうだな、助けるか」

誰にも聞こえないように呟いた。

「ハァハァハァ」

「早く、ルエ！！」

「待って、お姉ちゃん！！　キャッ！！」

後を走っていた、少女が石に躓いて

「ハァハァ、やっと止まったぜ」

少女達の後に追っていた商人が杖を持ちながら、近づいてきた。

「手間とらせやがって！！　覚悟しろ！！」

商人が呪文を唱えようとした時に

「待て」

俺は、杖を振るおうとした、男の腕を掴んだ。

「誰だ貴様！！」

「そこの姉妹を買うものだ」

「…本当か」

男は、杖を握ったまま俺を睨んだ。

「俺は、あんたに嘘をつく、理由がどこにある」

「…無いな、良いだろう、あんたにこの奴隷を売った」

商人は、ニタァと笑った。

「どれぐらいだ」

「5万ですな」

「買った」

そう言って、用意してあったケースを商人に渡し、商人から奴隷の首輪の鍵を奪った。

「んな!?」

ケースの中身を見て商人は、驚愕な顔をした。

「釣は、いらねー。行くぞ」
呆けてる姉妹を脇に抱えて屋敷に転移した。

「「えっ！？」」
屋敷を見た姉妹は、驚いていた。

「我が家へようこそ」

ル「あの〜何で私達を買ったんですか」
連れて来た後、二人を風呂に入れて、俺が機体の整備に使う作業着を貸してやった。

その後、自己紹介で先頭を走っていたのが
『シグ』１４才　長身で胸が小さい［B位］角有の亜人。
『ルエ』１３才　姉よりは、低い。胸は［A位］角有の亜人。
二人は、実の両親に売られたたらしい。

シ「簡単だ、暇な上にお前らには、魔法の才能があるみたいだから、

開花させたいと思っただけだ」

シ「…そんな、理由で？」

シ「そうそんな、理由だ」

俺は、素っ気なく答えた。

「てなわけで、お前ら、これを使え」

「「…何ですかこれ？」」

俺が渡したのは、エヴァが使っていた、魔法の触媒になる指輪の複製品

「これから、きっちりと鍛えてやるからな」

俺は、シャドウスキーンを着て立った。

「「えっ！？」」

二人が驚いた。

「覚悟しろよ！！」

かくして、シャドウは、二人の弟子を鍛え始めた。

アーバレスト
「また、屋敷が壊れる」
一人、呟いた。

第１４話

俺は、シャドウスキーンを着て、草原を歩いていた。

突然、上から
「魔法の射手　連弾・光の３０矢！！」
「いきなりか！！　だが甘い！！」
それを拳の連打で消した。

「もらった！！」
後から剣を構えながら走ってきた。

「あほ！！　最後まで油断するな！！」

刀を出して、数回切りあった。

「（ルエが居ない？）」
不振に思った時

「来たれ、虚空の雷、薙ぎ払え、雷の斧！！」

シグは、後に下がると、ルエの『雷の斧』が来た。

「くっ！！」

俺は、避けられず、もろに喰らった。

「ハァーー！！」

「えっ！！　ちょっ！！　待った！！」

動けずにいるとシグが剣を捨てて、勢いを付けて、俺に向かってきた。

「ガハッ！！」

それをもろに喰らった（鳩尾に）。

そして、動かなくなってシグとルエが

「「…　勝ったよ！！　師匠に勝った！！」」

二人は、勝った喜びで抱き締めあった。

「…だから、甘いって言っただろ！！」　俺は、立ち上がり二人の頭を殴った。

「「へっ！！」」

「死亡だ．　たく詰めが甘い！！　だがよくやった！！」

そう言って俺は、二人を抱き締めた。

「「／／／！！」」二人して顔を赤くした。

「顔を赤くしてないで、帰るぞ」

シグとルエは、急いで俺の脇に付いた。

「転移」

一言呟くと、俺とシグ、ルエが草原から屋敷の中庭に転移した。

「いつ見ても凄いですね、師匠の！！」ルエは、俺の腕に抱きついた。

「確かに、師匠は、剣術、魔法では、凄いの一言だ」

シグは、俺の隣で話していた。

「…ルエの魔法の射手で俺の気を引き付けて、シグが切り込む、その後に雷の斧、二人のコンビネーションが強いから、出来た芸当だ。」

「「えっ！？…それじゃ」」二人は、俺をじっと見ていた。

「合格だ、おめでとう！！」

「「ヤッター！！」」
又抱き合う二人。

「合格祝いだ、シグには、この剣だ。
ルエは、この籠手な」
そう言って、二人に渡した。

「…凄い」
シグは、早速抜いて剣を眺めて居た。

「凄いです！！」
ルエは、籠手を装着して魔力を流していた。

「シグの剣は、『魔法無効化』が付いている。だから、攻撃魔法を切れば、魔法は、消える。
ルエの籠手は、魔力を増幅する奴だ、多分魔法の射手、一発で１ｍ位のクレーターが出来るはずだ。」

「「…チートでは？」」

「考えたら、負けだ」

「「はぁ」」

「二人して、ため息吐くな。
それと、お前らアリアドネーで教師になれ」

「「えっ！！」」

「反論は、無し。
これが、紹介状な
んじゃ、行ってこい」
そう言って、シグに封筒を渡して、強制転移させた。

「行ったか。
アーバレスト、酒の用意をしろ」
背後から待機していた、アーバレストが出てきた。

「わかりました、座ってお待ちください」

「ああ、頼む」
俺は、椅子に座り、アーバレストが持ってくる、酒を待っていると

「ヤッホー、元気かシャドウ」

「！？……何でいる」

そこに居たのは、俺をこの世界に飛ばした、神だった。

「まあ、良いじゃないか
呑まないか？」
右手に握って居るもの俺に見せた。

「…わかった、から要件を言え」
（こいつが来ると、ろくな事がねえ）

「お主、原作道理に『創造主』を倒すのか」

「そうだが、それが？」

「ならば、これが居るな」
机の上に数発の弾が現れた。

「こいつは？」

「神殺しの弾だ」

「神殺しの弾！？
何で、そんな物、俺に？」

「創造主は、元下級神じゃ」

「元神？
何でこの世界に？」

「奴は、昔ある事をしてしまい、死神に消されるはず、じゃった」
酒を見つめていた、目に悲しみが見えた。

「…大体わかった。　その弾で『創造主』に撃ち込めば良いんだな」

「そうじゃ、頼むの」
そう言って、消えた。

「…アーバレスト、例のは、何隻出来た」

「４隻です」

「そうか、ベヘモスをそろそろ、作るか」

弾を懐のポケットに入れた。

第15話

毎朝日課のトレーニングをやって居る最中にある事に気が付き手を休めた。

「アーバレスト、そろそろ大戦だか、部隊の準備は、平気か？」

「サベージ　120機
ベヘモス　2機
TTD　3隻
ガーンズバッグ　9機が出来ています」

アーバレストは、淡々と答えた。

「そんぐらいか……ベヘモスは、後2機入るな」

「出来る限りやってみましょう」

「頼んだ、それと連合と帝国の状況は」　タオルを貰い、汗を吹いて聞いていた。

「軍備が拡大しています。やはり、『完全なる世界』の人間が関わっていると」

「そうなったか…、別件の『紅き翼』は、見つかったか？」

「はい、見つかりました。現在のメンバーは、　　　　ナギ・スプリングフィールド

青山　詠春

アルビレオ・イマ

　です」

「原作道理か、ありがとう」

汗を吹き終わった、タオルをアーバレストに渡して屋敷に転移しようと魔方陣を展開した。

「（ようやく、大戦の英雄とご対面か〜）」

内心、考えながら転移した。

「やれやれ、部隊の製作だけで大出費ですよ。マスター」

アーバレストは、転移した俺を見て、肩をすくめていた。

この話をしている間にも敵は、行動を起こそうと裏で活動していた。

とある部屋では、数人が今後の事について秘密の話し合いをしていた。

円卓の周りに座る老人が口を開いた。
「なぜ、計画が進まんのだ」
威厳のある言葉により沈黙が流れていた。

「「「「………」」」」

「何も言えずか」
老人は、目をつぶり椅子に背を押し付けた。

「…奴　奴が邪魔するのです！！」
口を閉じていた、一人が言い出した。

「奴とは？」

「『漆黒の刃』です」
別の人が答えた。

「…シャドウ、やはり貴様か、なぜ邪魔をする？」
老人は、過去を振り替えるような目でいた。

「計画に変更は、認められん、一刻も早く開戦するぞ！！」

周りの人間は

「「「オオー！！！」」」

返事をしてしまった。

そして、刻一刻と『大戦』に近づいた。

第１６話

「始まったか」
俺は、血と爆音が鳴り響く、戦場を眺めていた。

あの後、ＡＳ部隊の準備ができた直後に帝国が連合に侵攻を開始したのだ。

「…どうします？」　両手に７．６２ｍｍ弾（結界貫通弾装填済み）チェーンガンを掴み、両肩に８．８？Ｐａｋ４３　戦車砲、両足に小型ミサイルを装着した広域殲滅用装備を付けている、アーバレストが声をかけてきた。

「今は、連合の傭兵だが、紅き翼が出て来たらそっちに付くがな（本当なら、帝国側に着きたがったけどな）」

「解りました」

「それじゃ行くぞ、アーバレスト！！」
俺は、そう言って、、背中にＡＫ４７を2丁取り付け、２丁のＭ６０を両手で構え戦場に走り出した。

「了解！！」

―連合の最前線　３０分後―

「クソ！！　なんて数だ！！」

「さすがにキツいですね！！」

俺とアーバレストは、連合の最前線を陣取り、帝国側に銃を乱射していた。

「アーバレスト！！」度々突破を図ろうとする奴らにＡＫ４７の７．６２弾を打ち続けた。

「何ですか、マスター！！」

こっちは、肩に取り付けてある、８．８？砲で応戦していた。

「これから、俺１人で敵の陣地に殴り込む！！　その間ここを守れ！！」

「了解、マスター！！」

「さて、行ってくるか！！」
俺は、敵陣地に殴り込むために走り出した。

「生きて帰って下さい、マスター」
誰にも聞こえない様に言った。

―敵の陣地―
「邪魔だ！！！」
俺は、四次元からM２重機関銃（結界貫通術式付きゴム弾装填済み）を２丁取り出し、全方位に乱射した。

「なんだ、あｒ」

「結界が通用しｎ」

「た　助けてくｒ」

M２重機関銃の餌食になった相手は、身体中にアザを作って気絶していた。

「ハァ　ハァ　こんなもんか」
地面に刺した、M2重機関銃は、曲がっていたが背中を預けて居た、するると連合の陣地が押されてるのが見えた。

「アーバレスト、聞こえてるな」
俺は、無線機を取り出しアーバレストに連絡した。
「何でｓ「命令だ撤退しろ」……なぜ」

「前線が押されてる負けるぞ、だが連合から金は、キッチリ貰え」

「了解、お待ちしております」
無線機を異空間に放り投げた。

「さて、これからどうするか？」
俺が座って居る場所から見渡した、風景に帝国の艦隊や戦場を埋め尽くす兵が見えた。

「捕虜かこのまま、帝国の首都に潜り込むかだな」
俺は、これから先の事を考えていた。
（前者だと捕まったら死ぬし。
後者だと、…どんなメリットがある？）

「本当にどうするかな？」
俺は、流れに任せようと眠りにつこうとした。

「生きてる者は、居るか居るなら返事をしろ！！！」
急に女の声が響いた。

（女？　何で戦場に？アア　クソ！！）
俺は、焦っていた。女一人で戦場に居たら捕虜にされ、どうなるのかを知っていたからだ。

「ここに居る（なに、やってんだ俺…）」
右手振った。

「生きてるな！！　　良かった！！」

「…嬢ちゃん、名前は」
俺の前現れたのは、（褐色の肌に角、しかも皇女？見たいで幼い、まさかな　　ハハハ）
嫌な予感が背筋を駆け巡った。

「ヘラス帝国第三皇女のテオドラだ！！　それよりもお主の怪我の手当てだ！！」凄い剣幕でシャドウスキーンを脱がそうとした。
「大丈夫だ「大丈夫！！　　こんなに血がついてるのにか？」全部返り血だ」

「それより何で戦場に皇女が来るんだ」

「生きて居る者が居ないか探しているんだ！！」

「……ハァ　しょうがない手伝ってやる（本当にじゃじゃ馬だな）」

「手伝う、本当か？なら、生きて居る者を一人でも助けよう！！」

「それよりも、俺はな傭兵だからな、金を払って貰うぞ」

「アア　払おう！！」

「なら契約完了だな、よろしくなテオドラ姫」

「アア　頼む」

そう言って、俺は、生き残りを探すために戦場を駆け巡った。

一時間後

「そう言えば、お主の名は、何じゃ？」

「……　知ら無いのか!?、「…スマン」　…シャドウそれが俺の名だ」

「シャドウ？　…聞いた事あるな…」

テオドラは、思い出そうとしていた。

第１７話

俺は、テオドラと別れた後、屋敷に戻った。

「アーバレスト！！」

屋敷全体に聞こえる様に大声で叫んだ。

「何ですか、マスター」

すでに背後に立っていた。

「紅き翼の居場所は、知ってるな」

「知っていますが、それが？」

「座標を教えろ、それとベヘモスをフル広域全滅装備を装着して待機させろ」

「…紅き翼に会うのですか」

「…ああ、そうだ」　動かしていた、手を止めて言った。

「そう言えば、まだ紅き翼にラカンは、会っていないな」

振り返って聞いた。

「まだ、知名度は、低いですからね」

「…なら、今の打ちに仲間になるか（あいつらと居れば、アスナやアリカを助けれるからな）」

「ハァ　了解（又何か考えてるな）」

肩を落として、返事をした。

「で　奴らの居場所は」

「今の所、北の戦局で戦いながら、中央に向かっています」

「…そうか、こっちに向かってるのか。　なら、奴らが着くまで連合の艦隊でも落としてるか」

「了解　（ヤバい！！）」

内心、疲れていたみたいだ。

「そうなれば、ベヘモスの装備を対艦兵器にしろ！！」

「ハァ　　了解（人使いが荒いな）」

アーバレストは、格納庫に転移した。

～格納庫～

約４０ｍベヘモス５機が正座で待機していた。

「ベヘモスに対艦装備を装着しろ！！」　アーバレストがテキパキと指示を出し、それを整備用機ブッシュネルが実行していた。

（いつ見ても、凄いな）

指示する間、アーバレストは、整備中のベヘモスを見て居た。

《対艦装備》

・対艦　アックス　全長５０ｍ　×１（戦闘時は、格納庫で保管、使用時に転移魔法で取り出す）外見は、ヒートホーク

・対艦ミサイル　ハープーン６連装ポッド
背中に装着　転移魔法で自動装填される

・対艦リボルバーカノン　３０？砲　弾は、５発装填、威力は、１０？先の魔法界の駆逐艦を貫通出来る、外見がＳ&ａｍｐ;Ｗ　Ｍ５００に似ている。

・ワイヤーガン　２本左手に装着　飛距離２５０ｍ　約３０トンの

重さに耐えられる。

など他にも色々ある

~武器庫~

「早く、マガジンに弾込めろ！！」
俺は、弾込めているサベージに言った。

「リョウカイ」
手を止めることなく、動かしていた。

「（口数が少ないな、もう少しＡＩのレベルを上げるか）」
今後の事を考えていた。

［ケイコク　ケイコク　テキ　カンタイ　Ａチテンニ　セッキン］
突如、スピーカーから敵艦隊の接近警報が鳴り響いた。

「来たか！！　カタパルトの準備急げ！！」
俺は、シャドウスキーンを着て、弾を込めた銃を空間に放り込んだ。

「アーバレスト、そっちは、どうだ」
無線機を取り出して、聞いた。

「ベヘモス全機、準備完了　何時でも行けます」

「解った、俺が転移魔法で呼び出すから起動状態で待っていろ」

「了解しました」
無線は、切れた。

「カタパルト　ジュンビ　カンリョウ」
近付いてきた、整備サベージが告げた。

「やっとか、緊急展開ブースターを用意しろ！！」

「オモチ　シマシタ」２機のブッシュネルが緊急展開ブースターを持ってきた。

「すぐに、背中に装着しろ」
俺は、両足をカタパルトに固定して、緊急展開ブースターを装着した。

「ハッシャ　イツデモデキマス」

「シャドウ　いざ出る！！」

ガッ

ドゴゴゴゴ
１秒で２００ｍのカタパルトを駆け抜け、転移魔法陣を潜るとブースターが点火し、その勢いで敵艦隊に突っ込んだ。

―敵戦艦　ブリッチ―「右舷　５０？先から何か飛んできます！！」
１人の監視員が報告した。

「何！？　帝国軍か！？」
船長は、報告を受けて聞き返した。

「解りません、ですが、は　速いです！！」

「チィ！！　右舷に障壁を最大展開、迎撃魔法の用意をしろ！！」
部下に指示を出すが既に遅かった。

「距離2?!!　「なっ!?　」　駄目ですぶつかります!!」

「総員、衝撃に備えろ!?」

艦長の言葉を聞き、ブリッチ全員が衝撃に備えた。

―シャドウ―

「ハァアア!!」　俺は、戦艦の2?手前で緊急展開ブースターを切り離した。

ブースターは、そのまま飛んで行き戦艦の船底に当たった。

「駆逐艦:6、戦艦:1　面倒だな，それよりもあれは、特殊工兵小型艦:2だな」

俺は、戦艦の真下に降りて艦隊を見上げていた。

「一気に片付けるか。　『契約に従い

我に従え

炎の覇王!!

来れ

浄化の炎

燃え盛る大剣!!

燃える天空！！』」
俺は、右手を突きだして詠唱をした。

—敵戦艦　ブリッチ—「真下から高魔力反応！！」

「何！？面舵！！」

「ドガガガガ！！」　右舷の辺りから、炎柱が見えた。

「ぐっ！！　被害報告！！」
艦長は、倒れるの防ぎ状況を聞いた。

「右舷エンジン、障壁発生装着共に動きません！！」

「何！？　駆逐艦は、どうだ」

「3隻被弾！！」
通信兵は、驚愕の顔で言った。

—シャドウ—

「たく、ベヘモス達も頑張ってな〜」

俺は、燃える天空を打ち終えた後、艦隊から2？地点の所を眺めていた。

「ありゃ〜、「ダン！！」リボルバーカノンだな、「バシュ！！」

今度は、ハープーンか」

俺は、ベヘモスの破壊力を見ていた。

「全機、駆逐艦を4隻残しておけ」

無線機き言った。

『リョウカイ』

全機から返事が来た。

「…圧倒的だな」

ベヘモスの攻撃力に唖然としていた。

「…どうするか（元々、広域全滅と対艦を前提で作ったのがヤバかったか）」

『セントウ　オワリマシタ』

「…ん　そうか、全機戻れ」
通信が入り、ベヘモス全機を帰した。

「…悪いな、これが戦争なんだ」
10分で戦闘が終わった、場所を見て言った。
そこは、戦艦の残骸が散らばっていた。

その2日後、奇跡的に乗組員全員に死者は、居なかったが、大陸全土に俺の名が知れ渡った。

乗組員全員は、一様にこう言ったようだ「奴に会ったら、最後だ」

第１８話

「チィ！！　数が多すぎる！！」

俺の目の前には、数隻の連合の艦が砲術魔法を撃ちながら、近づいてきた。

「ベヘモス全機に告ぐ　近づいてくる、艦に攻撃！！」

『フカノウ　フカノウ』

ベヘモス全機に敵の駆逐艦の集団が近づいて来た。

「チィ　駄目か！！なら一気に破壊だ！！契約に従い

我に従え

炎の覇王

来れ

浄化の炎

燃え盛る大剣

『燃える天空』」

右手をつき出して放った。

「どうだ！！」

燃える天空が連合の艦に当たり煙を出しながら、今にも墜ちそうな艦は、１８０度回り撤退していった。。

―〇〇サイド―
よっ、俺はナギ・スプリングフィールド　こと『千の呪文の男』だ！！　俺達は、帝国最強であり、第三皇女の懐刀？の『シャドウ』って奴が中央の戦場に居るって聞いて来たら、連合の艦隊が意図も簡単に殺られてるのが見えていた。

「おいおい　まさかあいつが」
隣に居る、ラカンが小声で喋っていた。

「む！？　あやつだったのか」
師匠は、手を頭に置いていた。

「彼が、…ですか」　後に居るアルは、何かに感心していた。

「また、…バグキャラ…か」
詠春は、うなだれながら頭を押さえていた。

「はっ　俺は、行くぜ！！」
ナギは、飛び出して言った。

「しゃあねな」
ラカンと他の奴も続いた。

「！！　なんだこの魔力！？」
俺は、艦隊を粗方片付けて一息ついていると、膨大な魔力を感じた。
「最悪だー！！」
俺の目線の先には、紅き翼がもうスピードで俺の所に飛んできた。
「俺と勝負しやがれ！！」
ナギが俺に魔法を打とうとしたから、俺特製『拘束の槍』を放った。
「ンナ！？　くそ外れね～」
（まず一人撃破）
「久しぶりだな、影（かげ）」
ラカンが俺の背後に着地し、剣を構えながら挨拶してきた。
「そうだな、ラカン！！　それと、俺の本当の名は、シャドウだ」
俺は、エヴァとの仮契約で手にいれた、アーティファクトの刀『黒（こく）龍神（りゅうしん）』を出した。

「名前何て関係ねぇ、一気に行くぜ！！」
ラカンは、アーティファクト『千の顔を持つ英雄』を発動し多くの剣を取り出した。

「そうだな　いざ！！　シャドウ参る！！」俺とラカンは、久しぶりの死合を始めた。

～1時間後～
俺らの周りは、既に荒れ地とかしていた。

「流石だな、ラカン」

「そう言う、お前もな」
俺とラカンは、頭や肩から血を流していた。

「ああ、そうだ「おーい！！　俺も入れろ」げっ！？」
ナギが『拘束の槍』の鋼糸を数本付けたまま、殴りかかってきた。

「ガハハ　第2ランド開始だな！！」
ラカンは、笑いながら突っ込んできた。

「嫌だー！！」
俺は、叫んだ。

一方残された人達は、アーバレストとお茶を飲んでいた。
「美味いの～　じゃろ詠春」
「ええ　まさか、こんな戦場で飲めるなんて」
「奥が深くて、美味しいですね」
「いえいえ、まだ未熟ですよ」
上からゼクト、詠春、アル、アーバレストの順で俺らの戦闘が終わるのを待っていた。

「どうやら、終わりの様です」
アーバレストが顔を俺達が戦闘している方へ向けると、ナギの『千の雷』、ラカンの『斬艦剣』、俺の『燃える天空・改』を同時に放った。

ドガガガガ！！！！

同時攻撃は、思ったより威力が強かった…。（直径２？のクレーターが出来た。）

―屋敷―

「「イヤァー、悪いな！！」」

ナギとラカンの大声が響いた。

「まさか、お主達が知り合いとはな」

ゼクトは、アーバレストが出した、日本料理を食べていた。

「まさか…、おお！！　これは…」

アルは、エヴァの写真集を読んでいた。

「……ピクッ　ピクッ…」

詠春は、酒の飲み過ぎで死んでいた。

「お前ら！！　少しは、大人しくしろ！！」

俺は、こいつらのテンションの高さに体が悲鳴を上げた。

「まさか、影がシャドウだとはな」
ラカンは、酒を飲みながら、俺の背中を叩いた。

「そう言えば、影とは、何じゃ？」
ゼクトは、食べるのを止めた。

「影と言うのは、仕事名だ。ラカンとは、非合法組織（人身売買）の殲滅の時に知り合ったんだ」

「そうなのか～」
ゼクトは、顎を触っていた。

「それより、この飯は、美味いな！！」　ナギが食っていたのは、ちらし寿司だった。

「ちらし寿司だ！！　名前位覚えろ。それより、何でお前らがここに来たんだ？」
俺は、ナギ達を見回した。

「簡単な事だ」
ナギが立ち上がり、俺に指を指して。

「強い奴が居るって聞いたからだ！！」

「…強い奴が、居るだけで　　ハァ」

俺は、こいつの考えが解らなくなった。

「どうじゃ、シャドウ　紅き翼に入らんか？」

ゼクトが俺を誘った。

「良いぜ、こっちの依頼も期限が切れる頃だからな」

簡単に誘いに乗った。

「本当か！？　イヤ〜これから、面白い事になるな！！」

ラカンは、喜びながら、言った。

「私は、良いですよ。　　これからも、よろしくお願いしますね（写真集の方を）」

アルは、写真集にしか興味が無いのか！！

「んじゃ、これからよろしくな」

ナギが右手を出した。

「そうだな」

俺も右手を出して、握手した。

かくして、俺は、紅き翼に入った。

第１９話

面倒な事になった。俺が紅き翼に入った直後、帝国がグレート＝ブリッジを占領したのだった。

俺ら、紅き翼は、グレート＝ブリッジから１０？程離れた場所で待機していた。

「ナギ　どうやって、あれを奪還するんだ？」

俺の右側で立っている、ナギに話し掛けた。

「突っ込んで、魔法を至る所に打つ！！！」

「…お前らしい、作戦だな」

「そうだろ！！」

俺は、ナギの能天気さに疲れてきた。

「んじゃ　行きますか！！」

ナギは、そう言いながら立ち上がった。
「しょうがない」
俺は、立ち上がりながら右手にアーティファクトの『黒龍神』を構えた。
「ナギ、先手必勝だぞ！！」
「ハッ　解ってるぜ！！」
「ハハハ　面白くなりそうだ！！」
俺は、言う事を言った。するとナギとラカンが、空中停止をして各自の最強の技を放とうとした。
「燃える天空！！」
「千の雷！！」
「斬艦剣！！」
俺ら、三人は、最初から上級魔法を乱射していった。
「邪魔だ！！「ドガガガ！！」なっ！？」

近付いてくる、敵兵を倒していると艦砲魔法が俺の周りに着弾していった。

「シャドウ！！大丈夫か！！」
詠春が俺を探そうとすると

「大丈夫だ　詠春」
俺は、瓦礫を持ち上げて言った。

「ハハハ　流石だな、シャドウ」
ラカンは、艦隊に向かって剣の投擲を続けていた。

「ラカン　俺も艦隊を潰すのに入れろ！！」

「アア　良いぜ（こりゃ～切れてるな　）」ラカンは、俺の様子にビビッていた。

「…俺に砲を向けたらどうなるか、教えてやる」
俺は、転移魔法で敵艦隊の上に出た。

「…撃墜する
燃える天空！！」
艦隊のに何発も上級魔法を撃ち込んでいった。

あの後、結果としては、グレート＝ブリッジは、奪還に成功した。

俺ら紅き翼は、グレート＝ブリッジの端に居る、ナギに会いに行った。

「なあ　シャドウ、この戦争は、変じゃないか」

「…色々と戦争は、見てきたが、今回のは、確かに変だな」

ナギの問いに答えてやった。

「…俺の商売仲間（傭兵）から聞いた話じゃ、連合のお偉いさんは、帝国を全滅させる気だそうだ」

「…何で、そこまでするh「完全なる世界」何だそれ？」

「はるか、昔からある組織だ」

「どういう、いｍ「ナギ　後は、ガトウに聞け」…は？」
そう言って、俺が指さした、ナギは、俺が指さした方を見た。
そこに居たのは、
「スマン　遅れたな」ガトウと若きタカミチであった。
「平気だ、ガトウ　それよりも、頼んだ奴は、見つかったか」
「ああ、シャドウの言うとうりだった」
「おい　どういう意味だ？」
ガトウとは、仕事仲間であった。

「行くぞ、ナギ」
ガトウは、ナギを捕まえて歩き出した。
「おっ　おい！！　どこに行くんだ！！」
「本国首都だ！！」　俺は、懐から本を取り出した。
「「…　何ーー！？」」
ナギと詠春の声が響いた。

他の奴らは、『（またか〜）』と呆れていた。

「さっさと、行くぞ」

本の１ページを破った。

「てか、どうやってだ？」

ナギの疑問に俺は、実演してやった。

「こうやってだ」

破った、１ページに魔力を流して全員を転移した。

第20話

俺ら紅き翼は、連合のお偉いさんが用があるとかで本拠地の　に呼ばれていた。

「一体、誰が俺らを呼んだんだ、ガトウ？」

「そうだぜ、ガトウ　」

「会えば解るそれに、誰でも知っている人物だ」

ガトウは、俺らの先を歩きながら言った。

「…そうか（そういえば、この時期に本国首都に来たという事は…）
」

誰に会うかと思い出していた。

向こうから誰かが来てその人物を見た俺らは、驚いて大声で叫んでしまった。

「マクギル元老院議員！！」

詠春の驚いた声が響いた。

「…久しぶりだな、マクギル」

俺は、商売上の付き合いから、ため口で話した。

「うむ、久しぶりじゃなシャドウ」

「俺らを呼んだのは、あんたか」

「いや、こちらのお方じゃ」

マクギルは、横に動くと

「ウェスペルタティア王国のアリカ王女じゃ」

「………」

ナギの奴惚れたたな。

「…お久しぶりで、アリカ姫」

俺は、シャドウスキーンの帽子を脱いで、軽くお辞儀をした。

「ああ　久しぶりだな」

アリカ姫も軽くお辞儀した。

「…知り合いか？」　ガトウの疑問に俺は、答えてやった。

「…アリカ姫が幼い頃に何度か会って話をしていたからな」

俺は、遠い目をしていた。

「例えば、どういうのですか？」
アルの質問に俺は

「俺の昔話だ」
手短に言った。

「昔話ですか」

「それについて話す必要は、ない。それよりも、姫がこんな所に、完全なる世界が何時襲って来るか解らないのに」

「完全なる世界を知っていたか…今回は、その事について、来たのだ」
アリカ姫の顔が暗くなったのに俺は、気付いた。

「…了解、姫様」

その後、話し合いで俺らが完全なる世界の情報を探し出す事になった。

あれから、１週間で完全なる世界の情報が大分集まった。（ほとんど俺の情報網のおかげで）

「「………」」

俺とガトウの二人は、ある文書を読んで絶句していた。
すると、ラカンが入ってきた。

「おいおい、どうしたよ～」
ラカンは、俺らが読んでいた文書を読んで
「おい！？　こいつは、今の執政官じゃねーか！！　このメガロメセンブリアのナンバー2までが奴らの手先なのか！？どうすんだ！！」
俺は、ラカンが以外にも政治を知っていることに驚いていた。

「しょうがないが、ありのままを話すしかないな」

「そうだな、アリカ姫は、今どこだ？」　ガトウは、文書をしまっていると

「あ～、ナギと出掛け「ドガッン！！」たぞ」

ラカンの話の途中で外から爆発音が響いた。

「…まさか、あれの近くじゃないだろ」　俺の問い掛けに誰も答えない。

その後、俺は、魔法球の中で新兵器の準備をしていた。

「ガトウ、なぜ俺も行かなきゃいけない」

「この情報は、お前の手柄だと報告するためだ」

「…ハァ　さっきから嫌な予感がするんだが」

「お前がかー」

お気楽に返すラカンだった。

俺ら紅き翼は、執政官の不正をマクギルに言って、裁判官を寄越すように言ったら、証拠を見せてくれとか言い出したからわざわざマクギルの執務室に来たのだ。

「（なんだ、このやな感じは）」

俺以外の奴は、マクギルの話を聞いていたが、俺だけは、話が耳に入らなかった。

「（まさか！！）ナギ、合わせろ！！」

ナギと俺の目が合った瞬間、マクギルに向けて

『放たれろ　爆炎の槍　煉迅砲（れんじんほう）！！』

俺は、炎の槍をナギもマクギルに向けて放った。

「!?　おい、ナギ、シャドウ！！　何やって「良く見ろ、ガトウ」何？」

ガトウの話を中断させて、煙が舞う方に向かせた。

「まさか、ばれるとはね」

白髪の奴が現れた。

「お前、完全なる世界の人間だな」

「ああ、そうだよ闇の英雄」

「マクギル元老院議員は、どうした！！」ガトウの質問に敵は、

「今頃、メガロ湾の底だよ」

「そうか、なら　死ね」

俺は、敵の背後に転移魔法で移動して黒龍神で首を斬ろうとしたら

「殺らせません」

転移してきた別の奴が炎で阻んだ。

「チッ　すまん殺せなかった」

ナギ達の隣に戻った。

「わ　わしだ！　マクギル議員だ…　うむ　反逆者だッ！　ああ
うむ　確かだ　奴らに暗殺されかけたっ…は　早く救援を頼むッ
シャドウ　スプリングフィールド　ラカン　ヴァンデンバーグ
奴らは帝国のスパイだった！
奴らの仲間もだ！
今も狙われている軍に連絡をッ…」

「最悪だ」

「やられたな」

「げ」

「アハハハ」

上から、俺　ガトウ　ナギ　ラカンだ。

「君たちは少し　やりすぎたよ　悪いが退場してもらおう」

敵が左手を上げた。

「お前ら、離「ドガッ」クッ！！」

敵の放った魔法で俺らは、メガロ湾まで飛ばされた。

「アリカ姫が危ないな」

「詠春達、大丈夫かな」

「………」

上から、ナギ　ガトウ　俺だった。

「そういえば、ラカンは？」

俺は、周りを見回した。

「居たぞ、これだろ」

ガトウが右手に掴んだものを見せていた。

「居たか、　ナギ、詠春達と合流してアリカ姫を助けに行くぞ」

俺は、ナギ達の周りに転移魔法陣を展開して俺の屋敷に跳んだ。

第２１話

「…まずまずの警備だな」

「…どうだ、姫さんがどこに居るか解るか、シャドウ？」

「…多分、中央に居るだろう」

「そうか、なら助けに行くぞ！！」

俺らは、白髪の奴にはめられた後、俺の屋敷に跳んで、アリカを助けに『夜の迷宮』に乗り込む為の準備をしていた。

「あの壁の厚さなら実験にもってこいだな」

俺は、ミニガンを構え直した。

「そりゃ～なんだ、シャドウ？」

ナギの目が銃に向いていた。

「通称：ミニガン　７，６２弾を毎秒１００発を放ち相手をひき肉に出来る銃だ」

「んな事よりさっさと、行こうぜ！！」

ラカンは、剣を担いで待っていた。

「そうだな、行くぞお前ら！！」

「フム、そうじゃの～」

「ハァー、余り壊すなよ」

「フフフ　あの三人には、無理な話ですよ詠春」

上からゼクト、詠春、アルが色々言っているが、俺は、聞こえない振りをした。

「…先に行ってるわ」

俺は、転移で夜の迷宮の壁際に着地してミニガンの引き金を引いた。

グゥー　ガガガガガ

絶えること無く銃弾が夜の迷宮の壁を削っていった。

「固いなー、ならこれだ」

ミニガンを廃棄して６０ｍｍオートマティック・グレネードを取り出した。

狙いを定め

「とっとと、壊れろ」

引き金を引いた。

ドガッドガッ×２０

全弾当たった壁は、完壁に崩れてしまった。

「…これは、ヤッパリ対物・対怪物用だな」

壁の残害を見て言った。

ドガガガガ

ド派手な爆音と敵の悲鳴が聞こえてきた。

「あいつらも、派手にやってるな」

「居たぞ！！　奴を殺せ！！」

崩れた壁から敵兵が出てきた。

「出て来なければ、良いものを…」

グレネードを廃棄して両手を垂らして構えた。

「気絶してもらおう！」

「ふざけるな、お前ら奴を殺せ！！」

指揮官らしき奴が杖を俺に向けようとしたが

「無駄だ」

即座に転移して敵の背後に連続転移してそいつらの首に手刀食らわせた（峰打ちで）。

「どうだ、シャドウ？　そっちは、終ったか」
ナギ達が近づいてきた。

「ああ、呆気なく終ったぞ」

「よし、なら姫さんに会いに行きますか」

ナギが先頭で突入して行った。

ドガ　ボコ
通路を進む度にザコ兵が出て来るが、ナギとラカンのパンチで気絶していった。

「くそ！！　姫さんは、どこだ！！」
ナギが、今にもブチギレそうだった。

「…少しは、手加減してやれ（に　しても一体どこに居るんだ？）」

「…しょうがない、おい、起きろ！！」　俺は、気絶していた兵を

叩き起こした。

「うっ…誰…だ……」

起きた兵の目が目一杯開いた。

「悪いなー、アリカ姫達の居場所は、どこだ」

右手に握った黒龍神を首筋に突き付けた。

「ま　待て！！　そいつらなら、一番奥の牢屋に居る！！　だから

「ありがとよー」グワッ…」

話を聞き出した兵を再度気絶させた。

「ナギ　姫さん達は、一番奥に居るようだ」

「そうか、ありがとな、シャドウ！！」　急いで、ナギは、向かった。

「姫さんの事になると必死だな　フッ」

「やっぱり、ありゃ〜惚れてるな　ハッ」

俺とラカンは、ナギの様子を見て笑っていた。

「何やってんだ！」　ナギの声が聞こえた。

俺らは、ナギが壊した壁から牢屋の中に入るとアリカ姫とテオドラが居た。

「…シャドウ！！　会いたかったぞ！！」　テオが俺に抱きついた。

「…久しぶりだな…テオ（そういえば、テオも一緒に捕まってたな）」

頭を撫でた。

「…ロリコンですね」

アルの一言に俺は、ブチ切れた。

「アル！！　そこに座れ！！！」

右手に某漫画の伍長が使う１３？対戦車拳銃ドア・ノッカー（改造してリボルバーになった装弾数４発）、左手にヘリなどが付けるロケット弾ポット２０発を構えた。

「おい！？　やめろ！！」

「何、してるんですか！？」
ラカンと詠春が俺を必死に取り押さえた。
「離せ！！　アルをブッ飛ばさないと気が落「止めんか！！　シャドウ！！」…クッ」
テオの言葉で武器をしまった。
「おーい　移動しようぜ」
ナギは、アリカ姫と一緒に歩きながら、近づいてきた。

アリカ達を助け出した俺らは、紅き翼の隠れ家に転移魔法で跳んだ。
「これが紅き翼の秘密基地か？」
「テオ、俺らは、お尋ね者なんだぞ、目立ったら駄目だろ」
「そうじゃな」
俺は、テオを肩車して隠れ家の外で話していたら

「…ナギ「何だ？」　主の紅き翼は、無敵なのじゃろ？」

「世界全てが敵…良いではないか　こちらの兵は、たったの８人だが最強の８人じゃ」

「ならば我等が世界を救おう　我が騎士　ナギよ我が盾となり　剣になれ」

ナギは、閉じた眼を開け
「やれやれ　相変わらずおっかねぇ姫さんだぜ」

「いいぜ　俺の杖と翼　あんたに預けよう」

「…アーバレスト、今の撮ったか？」
俺は、遠距離に潜伏させたアーバレストに撮影を頼んどいたのだ。

「バッチリです」

「（良し）屋敷に戻ってろ」

「了解」

無線を切った。

「テオ　行くか」

「そうじゃな」

俺らは、ナギの後に付いて隠れ家の中に入って行った。

第22話

俺は、何時も道理ドアノッカー改とS&W M500（全体を厚くした物）を自室で整備していたら、扉を開けてタカミチが土下座して言った。

「お願いです！！　弟子にしてください！！」

「…どうした、タカミチいきなり？」

整備の手を止めて、タカミチを見た。

「今のままじゃ、誰かに守って貰うしか出来ない自分が嫌なんです！！」

「…強く成りたいわけか」

「はい！！」

「…それなら、ガトウや詠春に教えてもらえ（めんどいな〜）」

「シャドウさんは！！『アリアドネーの姉妹英雄シグとルエ』の師匠をしていたんですよね！！」

顔を上げげた、タカミチの言葉に俺は…

「…ドウシテ、シッテル」
俺は、目を見開いてタカミチを見た。
「えっ！？　英雄のシグとルエさんが、書いた英雄伝に書いてありましたよ？」
「…そうか（あいつら！！　めんどくさい事を！！）」内心、キレかけた、俺だった。
「あの〜、シャドウさん？」
「タカミチ「はい！！」…修行は、してやる。だが、今の話は、内緒だ良いな」　少し殺気を放った。
ビック！！
「はっ　はい！！」
「ハァー　タカミチ、これを着て外で待ってろ」
転移魔法で取り出したのは、特殊部隊が使っている黒の戦闘服（サイズ　タカミチ用）を渡した。
「あ　ありがとうございます！！」
タカミチは、さっさと外に出ていった。
「…出てこい、アーバレスト」

魔法陣が展開され、出て来た相棒だった。

「どうしました？」

「悪いな呼び出して、現在段階の部隊の規模は？」

「…ベヘモスが１０体、ＴＤＤ 戦艦型が１０隻）、補給型が１０隻、医療型が５隻、奇襲型が５隻の計３０隻が準備出来ています」

「そうか…それと、切り札になりそうか『例』の物は？」

「…ハッキリ言って、信頼性に劣ります」

「…しょうがない、試作品の域から抜け出せないからな……引き続き頼む」

「了解！！」

アーバレストは、転移魔法で本部に戻った。

「神様よ頼まれた事は、必ずやるぜ」

懐にしまわれた、創造主を殺すための神殺しの弾に触れた。

「シャドウさーん！！」

「悪い　悪い　今行く」
タカミチの声で、俺は、机の上に置いてあった、銃を片付けてタカミチをどう訓練するかと考えながら出ていった。

訓練が終わった、後タカミチは、身体中ぼろぼろで気絶していた。

ナギ達は、一様に
「御愁傷様」
と言っていた。

第２３話

俺ら、紅き翼は、６ヵ月の死闘（ラカン曰く、映画なら３部作、単行本なら１４巻分出来るだろ）の後、完全なる世界の本拠地を見つけ出したのだ。
それが、世界最古の都――王都オスティア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』

「不気味なくらい静かだな」

「なめてんだろ」

「…ラカン、油断してると殺られるぞ」ナギとラカンは、敵の本拠地の前でも、何時も道理に無駄話をしていた。俺は、神様からの贈り物『神殺しの弾』を長年使い続けたハードフレアに丁寧に一発一発装填していた。

「ナギ殿、シャドウ殿！！」

後ろから、声が聞こえて振り返った。

「帝国・連合アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

そこに居たのは、若き日のアリアドネー　セラス総長だった。

「外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる　たのんだぜ」

「ナギの言うとうりだ俺達の突入の援護は、たのんだ。それと俺の戦艦も動くから、気おつけろよ」

俺は、セラスに戦艦の事を言っておいた。

「？　シャドウ殿、戦艦とは？」

「あ〜、そろそろ着く頃なんだが」

セラスの、無線に通信が入った。

《セラス総長！！　大変です！！　正体不明の戦艦1隻が後方よりこちらに向かっています！！》

切羽詰まった、内容にセラスは、

「！？攻撃を「待て」えっ！？」

「それは、俺の戦艦だ」

セラスは、固まり他の奴らは、「又か〜」と頭を押さえていた。

「それと、セラス総長「はい！！」…戦艦にあまり近寄るな」

「えっ！？」

俺の言葉に又セラスは、固まった。

「それでは、敵の「平気だ」…わかりました」

渋々、従ったセラスだった。

「なあ、シャドウあれは何だ？」

ナギが俺の隣に来て、戦艦を指差した。

「あれは、『デスティニィー』全長　４００ｍ　全幅　４０ｍ　武装は、主砲の４５口径４６？２連装砲×２と魔法撃砲（千の雷と燃える天空等が書かれた術式を板に書いてリボルバーのシリンダーに入れた）、その他にも後部に垂直発射装置（ハープーン、シースパロ等）や近接戦闘の２０？機関砲などが多数装備してある」

説明を終えるとナギ達は、「チート戦艦か！！」と言っていた。

《ガッ…シャドウ、聞こえてるか》

連合に行ったガトウから、通信が入った。

「どうした、ガトウ」

《連合の正規軍の説得は　間に合わん帝国のタカミチ君と皇女も同じだろ》

「…しょうがない、上層部は、真っ黒だからな」

「シャドウの言う通りですね、…ですが戦うのが大変になりましたね」
何時の間にかアルが俺の隣に来ていた。
《…決戦を遅らせることは、できないか？》
「それは、無理ですね…彼らはもう始めています…『世界を無に帰す儀式』を
世界の鍵『黄昏の姫御子』は今彼らの手にあるのです」
「そう言うことだ、ガトウ早く正規軍を動かせよ」
《…わかった、こちらも努力しょう…死ぬなよお前ら…》
「ああ　行くぜ、お前ら！！」
「「「おう！！！」」」
ナギの号令と共に俺らは、完全なる世界の野望を止める為に動き出した。

第２４話

ナギの号令共に俺は、『デスティニー』に単独突撃させた。
ナギは、敵の前線に突撃してる、デスティニーを見て、慌てた。
「シャドウ！？　お前の戦艦が！！」
「慌てるな、ナギ。　それよりも良く見とけ、『デスティニー』の力を」

デスティニーは、敵前線の１０？手前で減速しながら、後部の垂直発射装置のハッチが開き、魔法撃砲のリボルバーが回り術式が装填され、４５口径４６？2連装砲が敵に向いた瞬間
垂直発射装置から大量のシースパローとクラスターミサイルが発射され大地にクレーターを作り
４５口径４６？2連装砲が爆音と共に敵を肉片に変え
魔法撃砲の千の雷等が容赦無き攻撃で敵を消し去ってゆく。

「「「……」」」
その光景にナギ達やセラス達は、固まった。

「アハハ…凄いな」
俺は、火力の強さに反省をした。

デスティニーが連続攻撃していると突然魔法撃砲の砲身が爆発したのだ、
その余波で、４５口径４６？2連装砲も誘爆した。

「耐久性に問題有りか」
俺は、危惧していた通りになった。
魔法撃砲は、広域殲滅系の魔法を連続発射には、砲身に多大な負担が掛かるのだ。

そして、黒煙を吹きながらデスティニーは、速やかに前線を離脱し転移魔法で基地に帰艦した。

「ナギ、道は、開いた。　行くぞ！！」
ハード・フレアを構え直した。。

「そうだな、行くぜ！！」
俺ら紅き翼は、デスティニーの攻撃で開いた、敵陣地の穴に突撃した。

「くそ！！　敵が多すぎる！！」
ナギは、敵の攻撃をかわしながら、魔法で反撃し、
「確かにな！！　　オラッ！！」
ラカンは、紙一重でかわし、次々と剣を投げていった。
「ナギ！　ラカン！邪魔だ！！　「「あん！？」」　灰に成りやがれ　燃える天空！！」敵の多さにキレた、俺は、燃える天空を撃ち

込んだ（ナギ達は、紙一重でかわした）。

「「危ねぇーだろ！！」」
ナギとラカンは、俺を怒鳴り付けた。

「黙れ！！　それより、突破口が出来たぞ！！」
燃える天空が通った後を指差すと宮殿まで一直線に道ができた。

「「…マジだ」」

「お前ら、急げ！！」
近付いてくる、デカイ悪魔にヘルファイアを４発発射した。

「行くぞ！！」
ナギを先頭に宮殿まで開いた、突破口を駆け抜けた。

「置き土産だ！！」　後方に居た俺は、Ｍ６７手榴弾を転移魔法で幾つか、敵がいる辺りに放ち、ナギ達の後を追った。

〜宮殿内部〜

「やあ　千の呪文の男、断罪者、また会ったね、これで何度目だい？僕達もこの半年で随分と数を減らされてしまったよ」
「知るか！！」
障壁貫通弾を装填してあるＰ９０をフルオートで放ったが障壁に阻まれた。
「酷いね、少しは「ドガッ！！」ヤレヤレ」
短気な俺は、ＲＰＧ－７を効かないと知りながらもフェイトに放った。
「シャドウ、行くぞ！！」
「そうだな、ナギさっさと片付けるか！！」
ナギの合図で俺らは、個々で闘い始めた。
「覚悟しゃがれ！！」
俺は、黒のフード野郎をアルと共闘で倒す事にした。
「アル、敵の動きを封じろ！！」
黒野郎は、次々と影を使った技や召喚魔法で攻撃するから隙が無いのだ。

「判りました、少し待って下さい…」

俺は、黒野郎の気を引くように前に出て闘っている。

「早く「魔法の射手２４０矢」なっ！？」

召喚獣に気をとられて、俺が黒野郎の攻撃を受けた。

「シャドウ！！」

「大丈夫だ、アル」

（危なー！！）

「とっとと決めるぞ！！」

黒龍神を振り上げた。

「行きますよ」

「ああ、頼む」

合図と共にアルの重力魔法が発動した。

「クッ！！「死にやがれ！！」ナッ！？　グワァ！」

「チッ（浅い！！）」

触手の動きが止まり、黒野郎を切り裂いたと思ったが、浅く直ぐに逃げられた。

「…アル、ナギの所に急ぐぞ」

「そうですね」
アルが先頭にナギ達の所に進んでいった。

ナギがフェイトの首を掴ま持ち上げていた。

「（ヤバい）離れろ、ナギ！！」

「ガッ！？」
フェイトを貫通してナギの腹をも貫通した。

「ムッ　最強防護！！」

「オラッ、気合い防御！！」

「装甲板展開！！」
ゼクトは、障壁を張りラカンは、気合い防御で防ぎ俺は、ベヘモス

の胴体部の装甲を転移魔法で出した。

「「「ナッ！！」」」
一度目でゼクトとラカンの防御が破壊され、二度目で俺の装甲に亀裂が入り三度目には、破壊された。

俺らが出せる最大の防御が呆気なく破壊されたのだ。

（ベヘモスの胴体部装甲は、特に衝撃と耐魔法に特化させた装甲である。）

攻撃が止むと相手は、宮殿の奥に戻っていた。

「グッ！？　（まさかシャドウスキーンの超高速再生を上回る攻撃をするとはな）」黒竜神がどこかに飛んでいた。

「シャドウ！！　大丈夫か！？」

「ああ、大丈夫だ、ナギ、…ゼクト、俺の傷を治してくれ」ナギの隣に居た、ゼクトに言った。

「！？駄目じゃ、治したとしても持って２０分程で！？」
ゼクトは、猛反発したが俺は…

「20分あれば、充分だ、だろナギ」

「そうだな、シャドウ。だから、アル、俺の傷を治せ！！」

「ヤレヤレ、あなた達は」

「止めろ！！、シャドウ　ナギ　あいつには、…勝てね」

両腕が飛んだラカンが気がついた様だ。

「ラカン、心配するな」

「そうだぜ、ジャック」

俺とナギは、ラカンを見て

「俺は、無敵の千の呪文の男だぜ？　俺は勝つ、任せとけ！！」

そう言って、宮殿の奥に入って行った。

「死ぬんじゃねーぞ、ナギ」

ラカンは、一人呟いた。

「シャドウ「なんだ？」…勝算は、あるのか」

「…ギリギリだな」懐から静かにハード・フレアを抜いた。

「なら、やる事は、決まったな」

「…ああ、そうだな」　俺とナギは、覚悟を決めた。

「見つけたぞ、創造主！！」

広い部屋にの中心に創造主が立っていた。

「…貴様らか、邪魔だ…」

一言呟いただけで、俺とナギは、吹き飛ばされ壁に衝突した。。

「「ガアッ！！」」　壁は、崩れ瓦礫とかした。

「…死ん「まだだ！！」何！？」

瓦礫を突き破って飛び出したナギと俺

「行け！！千の雷！！」

「燃える天空！！」　ナギと俺の同時攻撃だ

創造主が立っていた場所は、床が溶けて大穴が出来ていた。
「まさか、死ん「まだだ、ナギ」おわ！？」
俺は、大穴を覗こうとしたナギの首根っこを掴んで引っ張った。
床を突き破って創造主は、ナギに攻撃した。
「何す「馬鹿か！！　あれは、そんなも　」ガッ！！」
「ナギィィ！！」　今度は、衝撃系の魔法で気絶した。
「…誰に頼まれた」　何時の間にか創造主が背後に立っていた。
「…何がだ（まさか神様の事か）」
「大方、奴らの差し金だろ」
「…もし、貴様の言う奴らなら、どうする（こいつ、まさか）」
俺は、ゆっくりとハード・フレアを抜いた。
「簡単だ、貴様を…消す」
その瞬間、俺は、衝撃波で飛ばされた。
「ガアァ「やはりな、神殺しの弾か」…ク…ソガ」

創造主は、何時の間にかハード・フレアを掴んでいた。

「愚か「雷の斧！！」何？」

俺に止めの一撃を放とうとした創造主に　雷の斧が当たった。

「大丈夫か？」

「ああ…ナギ、同時攻撃だ」

「ニッ…そうだな、行くぜシャドウ！！」

「煉獄の業火よ

我の為に集え

全てを焼きつくし

灰にする業火よ

我の力となれ！！

『奥義　業火煉火装』」

術式が発動した瞬間、炎の旋風が俺を包み、旋風が消えると。

「……行くぞ、創造主！！ここが、貴様の最後だ！！」

「…なぜ、貴様が煉獄の業火を使える！？」

創造主は、俺の姿を見て慌てた。

「…教えるか」

「シャドウ、行くぜ」

俺とナギは、創造主に向かって飛び出した。

「行くぞ、ナギ！！」

「そんな、攻「背中ががら空きだ！！」グハッ」

飛び立とうとした創造主は、俺の容赦のない、蹴りを背中に受けた。

「おう！！」

ナギと俺は、創造主の正面と背後に回り

「ウォオオオオオ！！」

「ダァアアアアア！！」

創造主を反撃をさせない為に殴り続けた。

「…何故だ、何故邪魔をする」

「黙れ！！　」

「ふざけんな！！」　創造主の言葉に俺らは、キレた。

「お前の身勝手な行動で世界を消してたまるか！！」

「…何故、わからんこれしか助かる「一部の人間だけだろ！！残された奴は、どうなる！！」……」俺の言葉で創造主は、黙りこんだ。

「俺達なら、全ての人間を助けてやる！！」

「ニッ　そうだな、シャドウ、俺達が助けてやるよ！！」

「…フッハハハハ　この世界が貴様らの青臭い夢物語で片付けられると思うな！！」

「「夢物語にするか！！」」

「実現させてやるよ俺達が！！
咎人を滅する業火よ俺に力！！
『断罪の右腕』」
俺にまとわりついていた、炎が右腕に集まっていた。

「なんだ、その禍々しい腕は！！」
右腕に込められた、魔力の大きさと業火の炎に怖れているようだ。

「シャドウ、その「ナギ、決めるぞ」…しゃあねいな！！」

「最後だ、創造主！！」

「人間をナメるな！！」

俺は、最後の力を振り絞って、断罪の右腕で殴り飛ばした。

「そうかなら、この私を倒し、絶望と言う未来を見るがいい！！」

「「ウオオオオ！！」」

最後の一撃を放った。

「何とか勝った」

「ああ　そうだな、ナギ…だが、仕事は、まだ終わってないぜ」

俺は、ナギに肩を貸しながらアル達の居る所に歩いていた。

「姫子ちゃんだろ」

「それもあ「ゴゴゴゴ」なんだ？」

俺は、後ろ向くと小さな光球が次第に周りを覆うように大きくなっていた。

「…あれって、創造主がやろうとした、儀式のやつだろ！！（何！！創造主、倒したのに！！）」

「ヤベー、逃げるぞ、シャドウ！！」
ナギは、どこかに連絡した後、外に向かって走り出した。

「了解」

「アーバレスト！！「はい」今すぐ、小型高速機をだせ！！」

突如、壁に大穴が空いた。

「ナギ、行くぞ！！」

「ハァー！！」

大穴から飛び出した、俺達を迎えたのは、ジェットエンジン式のV－22オスプレイの後部ハッチだった。

「急いで、離れろ！！」
操縦席に向かって言った。

「…ありゃー「メガロメセンブリア国際戦略艦隊と帝国北方艦隊だな」て事は…」

「アリカ姫とテオドラが巧くやったな」

「やっとか……」

ナギは、苦笑しながら、寝た。

「全部隊、オスティアに集まれ」

通信機に言った俺も寝た。

第25話

「うっ…ここは「起きたな」シャドウ！？」

「落ち着け、ナギ」
ナギがベットから出ようとしたの俺が押さえ付けた。

「ここは、どこだよ」

「オスティア周辺に停泊中のＴＤＤの船医室だ」

「勝った「まだだ」はぁ？」

「起きましたか、ナギ」
「やっとか、馬鹿弟子」
扉を開けて入ってきたのが、アルとゼクトだった。

「アル　師匠　生きてたのか！！」

「？　アル、ガトウ達は、どうした？」

「フフフ　先に会場、行っていますよ」

「そうか、ナギ行くぞ」

「ああ、どこにだ？」

決戦の時に着ていたローブを渡した。

「皆が待つ所にだ」　ローブを着たナギとゼクトの首を掴んで後部に歩いて行った。

「シャドウなぜ、わしとナギの首を掴んでいるのじゃ？」

「アルは、既に逃げているからだ。残った、お前らも逃げたら、主役が居なくなるだろ」

ナギは、ボケ～とした顔で俺を見た。

「んなの「問答無用」卑怯だろ！？」

逃げようとした、ナギを鋼糸で巻き付けた。

「転移発動」

ナギとゼクトを掴んだまま、その場から消えた。

〜オスティア　授賞式待合室〜

「「カッタリ〜」」　ナギとラカンは、授賞式の最中にも関わらず、
「酒飲みて〜」やら「眠りて〜」等を口ずさんでいた。

「お前ら、少しは黙らないか！！」
詠春は、額に血管が浮かび上がっていた。
「詠春、落ち着けまた、傷が広がるぞ」
「そ　そうだな」
「緊張し過ぎなのじゃ、詠春は」
俺とゼクトは、キレそうになった詠春をなだめた。

「ナギ　ラカン、黙ったらどうだ」

「「あ〜あ」」
二人して、こっちを向いた。

「これが、終わったら酒を飲みに行くか？」

「「おっ　いいな」」

「だから、今だけ静かにしろ」

「しゃあねぃな～」
「しょうがね～」

「（案外、使えるな）」
二人を黙らせる方法は、エサを吊るすことだとアルから聞いていた俺。

外の歓声が一段と大きくなった。

「出番じゃな」

「おっし、行くかお前ら」
ナギの号令で俺達は、立ち上がり扉を開けた先には

「「「ワァアアア！！！」」」
はち切れんばかりの歓声が俺達を迎えた。

授賞式も終盤に入ろうとした頃、俺が一つの爆弾を投下しようとカ

メラ？の前に移動した。。

「済まないが、これは、全国中継だな」

「!?　そ　そうです！！」

「そうか、なら今からやることを映してほしい」

「?　はっ　はい！！」

「スゥ　これを観ている、全国民に言おう！！　この俺シャドウは、何百年を生きる不老の化け物だ！！」
シャドウスキーンの帽子を取ってカメラに向かって叫んだ。

「「「……エッ」」」

俺の一言で歓声が消えた。

「一部の奴らは、俺の正体を知っているだろう！！
俺の以前の２つ名は、『漆黒の断罪者』『暗殺者』等いくつもある！！」

一部のギルド関係者や騎士団は、「まさかな」という感じだ、出席していたＭＭ元老院は、顔が引きっていた。

「あ　あり得ん」

「まさか、気付かれて居たのか」

「ヤバイぞ、あいつを止めないと」

ＭＭ元老院達は、騒ぎ始めた。

「皆に見せたいのは、ＭＭ元老院の不正と虚偽の数々だ」

目線をＭＭ元老院の集団に向けた。

元老院達の顔がみるみると青くなっていった。

カメラに数々の元老院の悪事や不正が写し出された。

「「「「…………」」」」

映像を見た人達は、元老院達を睨んでいた。

「で　でたらめだ！！」

「嘘の証拠を作るな！！」

身の潔白を証明しようと、必死にあがいていた。

「なんなら、出るとこ出ようじゃないか！！」

「「「うっ！？」」」

元老院達の言葉が詰まった。

「てな訳で、出てこい」

元老院達の周りに１５機のＡＫＭやベネリＭ３等で武装したＭ９が現れた。

「んじゃ、そいつらを連行しといて」

「「了解」」

各機体から返事が返ってきた。

「マスター、少しヤバいです」

アーバレストが俺の隣に来た。

「ヤバいって？何が」

「元老院の中で完全なる世界の幹部であろう、人物がいません」

「…逃げたか　ハァ」アーバレストの報告を受けた、俺は、ため息を吐いた。

「すいません、マスター」

「シャドウ、これはどういうことだ！！」

アリカ姫が近づいてきた。

「後で話「ふざけるな！！」…だから、必ず後で話す」

俺は、キレそうになるのを抑えた。

「…必ずだぞ、シャドウ」

渋々、承諾してくれた。

「ありがとな、アーバレストそいつらを連行しといてくれ」

「了解、ほら歩け」　アーバレストとM9が元老院達を連行した。

「俺は、どこにも囚われない部隊『ミスリル』を作る事を宣言する！！」

「「「ハァァァ！！！」」」

一段と声がでかくなった。

俺が爆弾発言をしたらアリカ姫に色々言われ殴られた後、紅き翼のメンバーでとある酒場で酒を飲んでいた。

「…これで…よかったよな」

ナギ達が騒いでるテーブルから離れた場所で1人ウォッカを飲んでいた。

「どうしましたか、シャドウ」

アルが酒を持って、近づいてきた。

「…いや、何でもない　お前も飲めよ」

「私は、これだけで十分です」

右手に掴んでいたワインを見せた。

「んだと〜！！」

「やるか〜！！」
ナギとラカンが酔った勢いでケンカを始めた。
「フッ　何時もの光景だな」
「ええ、そうですね」
俺とアルは、何時もの光景を見ながら酒を飲んだ。

この光景が続けば良いと俺は、思っていた。
だが現実は、時として残酷だ

一時間後
オスティアは、崩れ墜ちようとした。

第２６話

「逃げろ！！　崩れるぞ！！」

「何で魔法が使えない！？」

「助けてくれ！！」

至る所から人々の罵声や悲鳴が聞こえて来た。

「壁が倒れるぞ！！」

逃げる集団を押し潰そうと壁が墜ちてきた。

ある者は、絶望に顔を歪め

ある者は、家族を抱き寄せた

その者達は、死を覚悟した。だが１人の英雄と幾多者の機械兵達がそれを救った。

「前方の壁に向け、一斉、砲火！！」

黒のコートを着た男が背後にいる、黒で統一された機械兵の両肩に装備された８０ｍｍライフル砲を撃ち込んだ。

「サベージ隊は、崩れ墜ちてくる障害物を破壊。他は、救援活動を

開始しろ」

「「「了解」」」

「旗艦、そっちは、どうだ」

「たった今、全戦艦が位置に着きました」

現場に出ている俺は、無線を使って旗艦に居るＭ６に指示を出していた。

「よし、全戦艦に通達、特殊術式　装填」

「特殊術式　装填」

Ｍ６は、繰り返して通達した。

「…術式…展開」

「術式　展開」

Ｍ６は、手元にあるレバーを押した。

オスティアを囲うように配置された、それぞれの戦艦や駆逐艦から巨大な魔法陣が展開された。

「魔力充電率　９０%…　９５%…１００%　　充電完了」

「第一次魔法陣・第二次魔法陣に魔力を流せ」

「第一次魔法陣・第二次魔法陣に魔力…流れてます」

「最終第三次魔法陣に魔力循環を確認」

オペレーター席に座る数機のＭ６が魔法陣の状況を逐一報告していた。

「全魔法陣確認完了」

「…マスター、今までありがとうございます」

艦長席に座って居るＭ６が無線を通じて俺に最後の言葉を残した。

「……馬鹿…野郎が」

「それでは、マスター」

そう言って無線は、切れた。

「頼むぞ、お前ら」　旗艦を見た。

〜旗艦〜

「…これより、魔力消失を止める」

オペレーター席に座って居る、Ｍ６達が艦長のＭ６を見た。

「…大魔力礼装砲　撃て！！」

旗艦の砲が光の柱を打ち出した。

光の柱は、オスティアの周りに配置された、戦艦の魔法陣を通過し屈折、次の戦艦に繋がる為に向かって行った。

「各艦に柱の接続が完了しました」

「…さらば」

その瞬間、各艦に繋がっていた光の柱は、オスティアを包み込んだ。

〜とある旗艦の艦橋〜

そこには、オスティアの民を助けようとアリカ姫が指揮している、艦橋で合った。

「なんだ！！」

「アリカ姫！！」

救出活動中の兵士が艦橋に転がり込んで来た。

「謎の光がオスティアを包んでいます！！」

「光が…だと？」

兵士の報告を聞いた、アリカは、艦橋からオスティアを見た。

「なんだ、あれ「アリカ姫！！」今度は、何じゃ」

「魔力消失の勢いが、弱まっています」

「なんだと！？」

アリカは、モニターを見た。

「何故、魔力消失の勢いが？」

アリカ姫は、モニターを見ながら呟いた。

その頃、オスティアでは、いつ崩壊するのか恐怖と隣合わせの救助活動が続いていた。

「この瓦礫をどかせ！！」

各部隊のＡＳは、瓦礫の山や壁を壊して道を切り開いて、逃げ遅れた、住民を誘導していた。

「マスター！！」

通信機を背負った、Ｍ６が走ってきた。

「なんだ」

崩れ落ちる、瓦礫を黒龍神で切り裂いていた。

「艦隊からの応答が途絶えました」

「…そうか」

一瞬動揺したが、すぐに落ち着いた。

「それと、魔力消滅の勢いが衰えています」

「…成功したか」

俺は、旗艦の方に目を向けた。

すると艦隊の高度が徐々に墜ちて行った。

「おい、戦艦が墜ちてくぞ」

「…ほんとだ」

「何故だ」

住民が浮いていた、戦艦を見て騒ぎ出した。

「…全軍、負傷者を早く連れ出せ」

俺は、感傷に浸る暇なく次々と指示を出した。

オスティアの崩壊が止まり、
住民の救助が完了した。

だが、オスティアを囲む様に配置した、軍艦は、全てが地に墜ちた。

オスティア崩壊騒ぎについて政府は、詳しい事を伝える気は、無いようだ。

オスティア、近くの丘に巨大な石碑が建てられた。

—報告書—

オスティアの土地は、一部が崩れ墜ちたが死者は、奇跡的に居なかった。

ミスリルの保有していた、軍艦30隻、乗組員9000人が…消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4456m/

魔法先生ネギま！　～異世界からの暗殺者～

2011年2月1日22時54分発行